

## 沖合底びき網漁業の概要

かけまわし漁法という方法で海底に住むエビ、カニ、魚などを漁獲します。

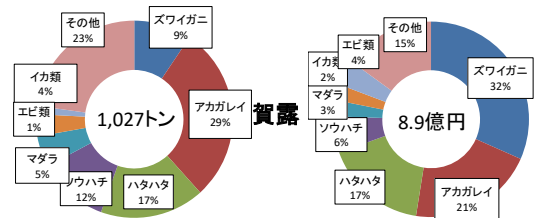
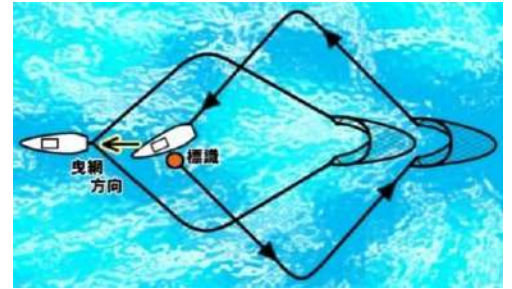
【魚種】ハタハタ・ヒレグロ・アカガレイ・ソウハチ・ズワイガニなど

【漁場】山陰沖

【隻数】鳥取県に水揚げする主な稼働船数 鳥取県漁協賀露支所：4隻

同網代港支所：10隻、同境港支所：3隻、田後漁協：6隻

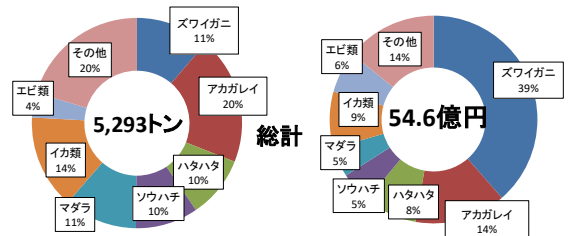
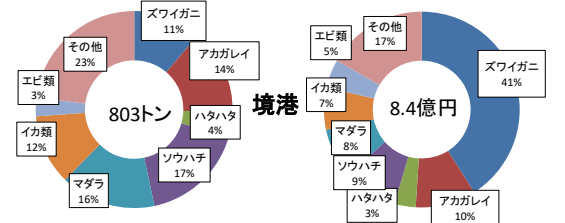
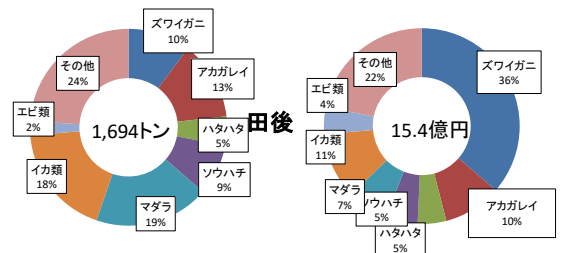
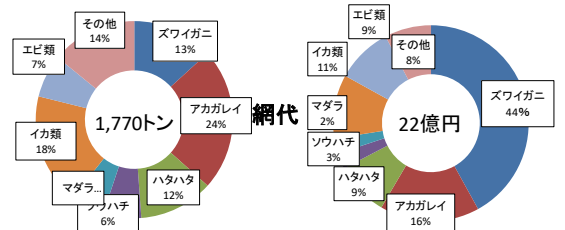
【漁法】まず浮標を投入し、図のように四角形を描くように船を走らせながら網を海に入れます。最後に浮標を引き揚げ、ひき網の一端を回収し、網をひきます。1回あたりの作業時間は約1時間半で、網を揚げた後、移動して次の作業位置を決め、前回同様の作業を昼夜を問わず繰り返し、1航海3～6日程度で帰港します。



### 2025年の漁獲状況

漁獲量の合計は、5,293トンで、その主な内訳はアカガレイ20%、ソウハチ10%、ズワイガニ11%、マダラ11%、ハタハタ10%でした。

漁獲金額の合計は、54.6億円で、ズワイガニの割合が39%を占め、次いでアカガレイが14%、イカ類（ホタルイカが主）9%、ハタハタ8%となりました（前年から268トン減少，1.8億円減少）。



漁協・支所	2025年		2024年との比較	
	漁獲量 (t)	漁獲金額 (億円)	漁獲量 (t)	漁獲金額 (億円)
賀露	1,027	8.9	-41	-0.1
網代	1,770	22	-335	-0.6
田後	1,694	15.4	+135	-0.6
境港	803	8.4	-27	-0.4
合計	5,293	54.6	-268	-1.8

地区別魚種別漁獲量及び金額

## 現状の課題と解決に向けた取り組み

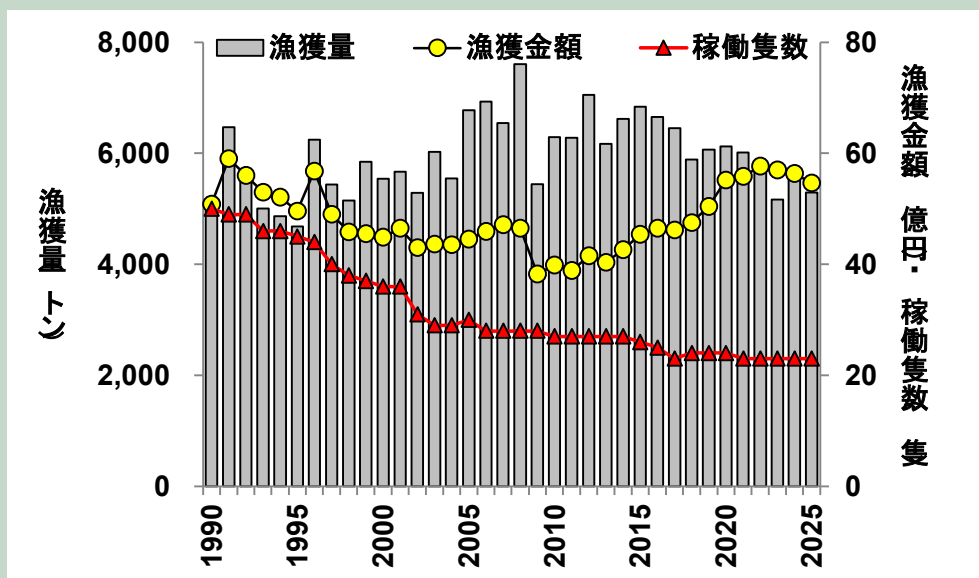
### 資源管理とブランド化の推進

本県のブランドとなっている松葉がにを漁獲するこの漁業は流通・観光産業への貢献度も高くなっています。しかしながら、現在の船団数は1989年（平成元年）の52隻から23隻まで激減しています。鳥取県の重要な漁業であるため、これ以上の廃業船を出さないようにしなければなりません。



また、沖合底びき網漁業が長い間続けられているのは、漁業者自らの資源管理への取組によるところが大きいと考えられます。今後も引き続き漁業者と協働で漁獲サイズ及び漁獲枚数の制限や水がに（若松葉がに）の禁漁区の設置及び漁期の短縮など資源管理方策を検討していきます。そして、ズワイガニのブランド力の強化を図るため2015年漁期から立ち上げたトップブランド特選とっとり松葉がに

「五輝星」は、2025年漁期に過去最高の平均単価を記録し、関係者の努力により、ブランド価値が高まってきました。また、近年はホッコクアカエビ等の船上凍結や、マダイ、ヒラメ等の活締め処理、クロザコエビ（もさえび）等は活での出荷も一般的になっており、ズワイガニ以外のものの魚価も向上してきています。



鳥取県沖合底びき網の漁獲量・金額・稼働隻数の年推移

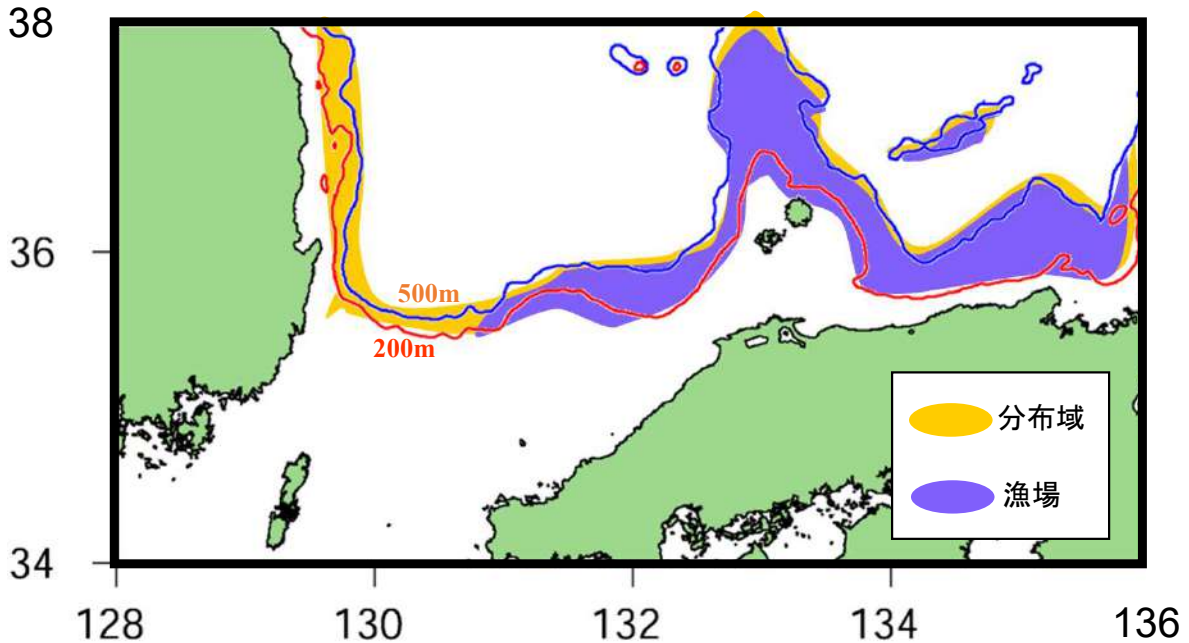
1990年代から沖底船の稼働隻数は半減しているにもかかわらず、近年の漁獲金額は高い水準を維持しています。

# ズワイガニ (地方名 松葉がに・若松葉がに・親がに)



## 生態

【分布】 陸棚斜面の水深200～500mの海底に分布している。

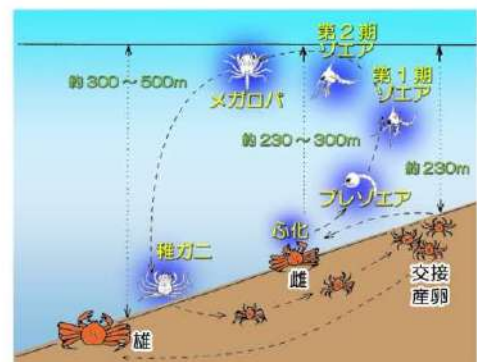


【成長】 ふ化から稚ガニになるまでは水深300m以浅を浮遊する。オス（最大甲幅約15cm）はメス（最大甲幅約9cm）より大きくなる。これは脱皮する回数がちがうため、オスは12回程度、メスは10回程度脱皮する。

松葉がにと若松葉がにはDNAの分析などにより同一種であると確認され、オスの脱皮後1年未満の個体を若松葉がに、1年以上経過したものは松葉がにとなる。

【成熟】 産卵は毎年2～3月に行われる（初産のみ8～11月）。

【食性】 ヒトデ、魚、イカ、貝などを食べ、時には共食いもする。



## 漁業の特徴

【漁法】 沖合底びき網漁業により漁獲される。

【漁期】 雄は11月6日～3月20日（自主規制によって若松葉がには2月1日～2月20日）  
雌は11月6日～1月20日（自主規制によって11月6日～12月31日）

# 漁獲状況

中位・増加

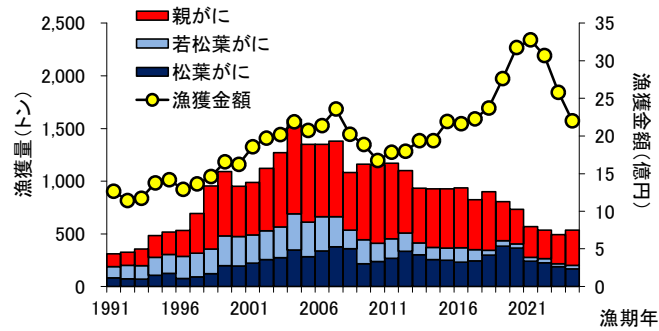


2025年漁期（2025年11月～2026年3月）のズワイガニの漁獲量

## 【松葉がに】

- ・資源状況が中位、増加の傾向にあり、漁獲量は前年を上回りました（前年比161%）。漁獲金額は小～中型個体の水揚げが増えた影響で、単価が下がり、前年並みの漁獲金額に落ち着いています（前年比94%）。

（五輝星は132枚が認定され、前年より26枚減少）



ズワイガニの漁獲量・金額の推移（漁期年）

## 【親がに】

- ・漁獲対象のクロコの資源状況は高水準を維持し、漁獲量は前年並となりました（前年比95%）、単価はやや上がり、前年並みの漁獲金額となりました（前年比102%）。

## 【若松葉がに】

- ・漁期の短縮、漁獲枚数制限の強化により、漁獲量は前年より減少（前年比74%）、単価は上がり漁獲金額は前年並みを維持しました（前年比92%）。

## 【漁期年比較】

漁期年 (11-3月)	松葉がに (脱皮後1年以上の雄)	親がに (雌)	若松葉がに (脱皮6ヶ月以内の雄)	計
2022	227	268	40	535
2023	189	276	27	492
2024	166	334	34	534
<b>2025</b>	<b>267</b>	<b>318</b>	<b>25</b>	<b>610</b>
前年比	161%	95%	74%	114%

(単位:トン)



## 資源を大切に使うための取り組み

ズワイガニは生まれてから9～10年で12回脱皮を繰り返してやっと漁獲サイズのみズガニ（若松葉がに）になります。さらに1～2年で商品価値の高い松葉がにとなります。若松葉がにや小さな松葉がにの漁獲量を抑えることで、数年後松葉がにの漁獲量を増やすことが大切です。今後もズワイガニの資源を末永く利用していくためには過度な漁獲を控え、水温が高く混獲死亡が多くなる11月の公休日を増やすことで操業日数を減らしたり、小型のカニが多い海域で操業を控えるなどの自主規制の強化を引き続き検討していくべきであると考えています。なお、2016年漁期から、鳥取県及び兵庫県の沖合底びき網漁船は、11月のカニ漁期に2日間以上休漁する自主規制を追加した資源管理を実践、その後も規制を強化し、2025年漁期も11月に108時間以上（11/15までに36時間を1回、24時間を3回または36時間を2回）休漁することや、若松葉の水揚げ枚数制限をさらに強化しています（1航海当たり700枚→500枚）。

### 【松葉がにの成長過程】

9～10年間で12回脱皮を繰り返してやっと **若松葉がに**になる

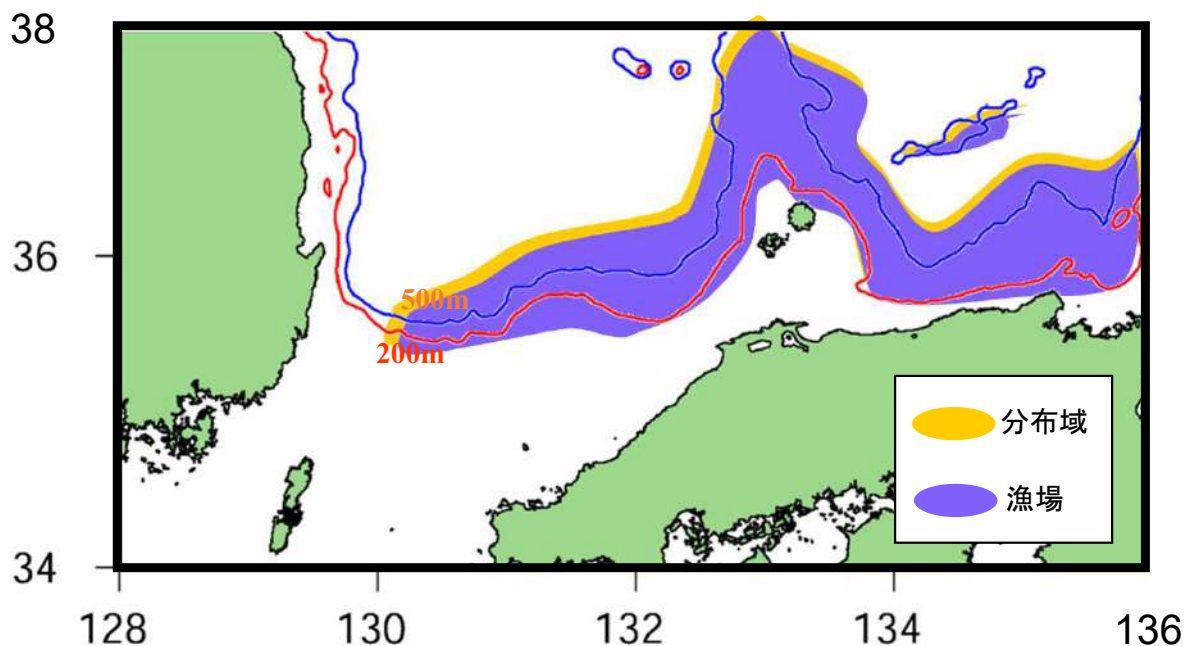


# アカガレイ (地方名 まがれい)



## 生態

【分布】 能登半島から山口県沖合の水深150m～900m



【成長】 雌の方が大型になり、体長40cm程度、雄は30cm程度になる。

【成熟】 成熟年齢は雄は2歳（15cm）、雌は5歳（25cm）。3～4月に産卵する。

【食性】 ゴカイ類、クモヒトデ、アミ類、いか類などを食べる。

## 漁業の特徴

【漁法】 沖合底びき網漁業により漁獲される。

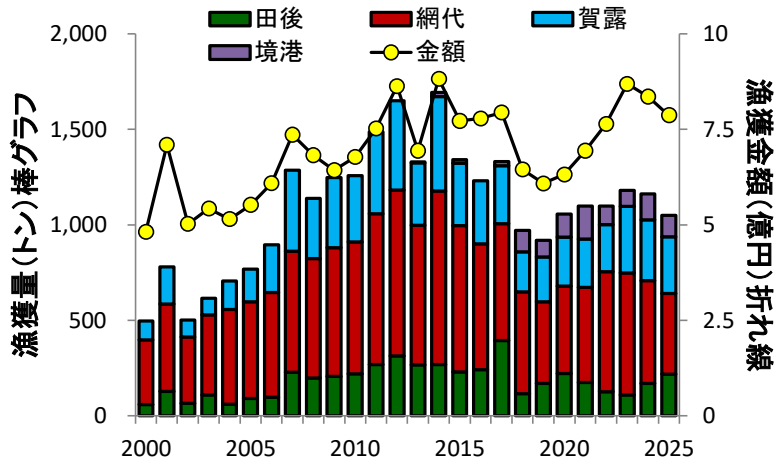
【漁期】 春に多く漁獲される。



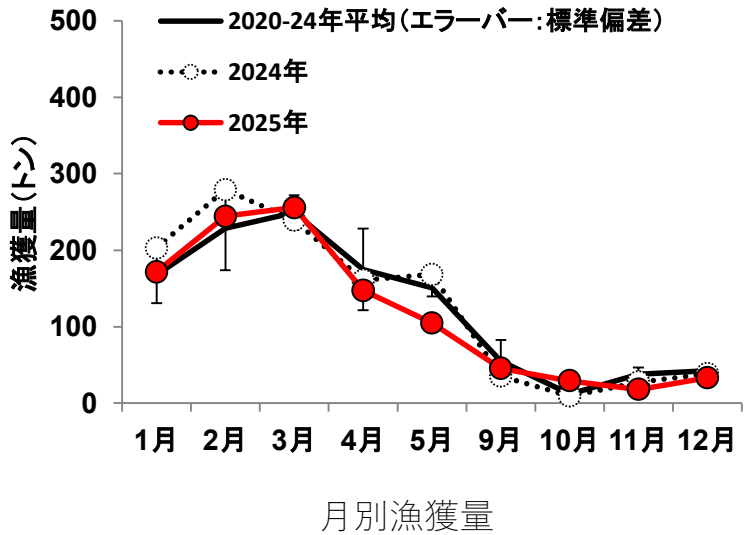
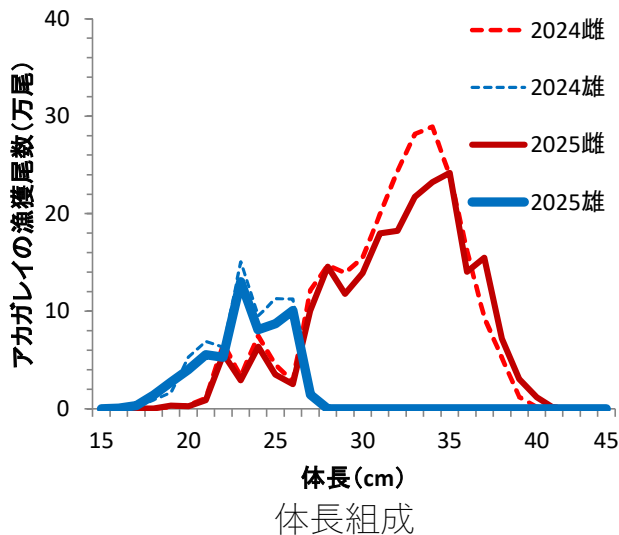
## 漁獲状況

### 中位・横ばい

2025年のアカガレイの漁獲量は1,051トンで前年並の漁獲量となった（前年比91%）。月別の漁獲量も概ね各月で前年、平年並みの漁獲量になった。体長組成を見ると、前年と類似しており、雌は約30～35cm、雄は20～25cmが主体でした。雄、雌ともに小型個体（20～25cm）でモードが見られ、引き続き安定した漁獲が見込めます。

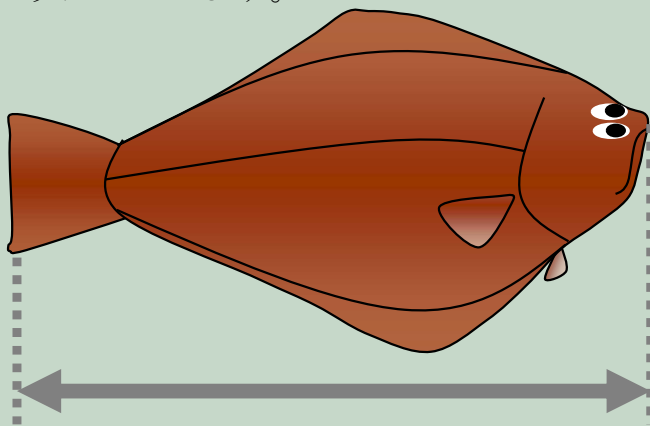


年別地区別漁獲量



## 資源を大切に使うための取り組み

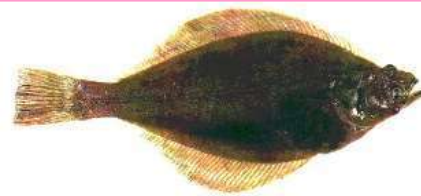
鳥取県の漁業者は資源を保護するため、全長20cm未満のアカガレイを漁獲しないようにしています。



20cm未満は獲らない



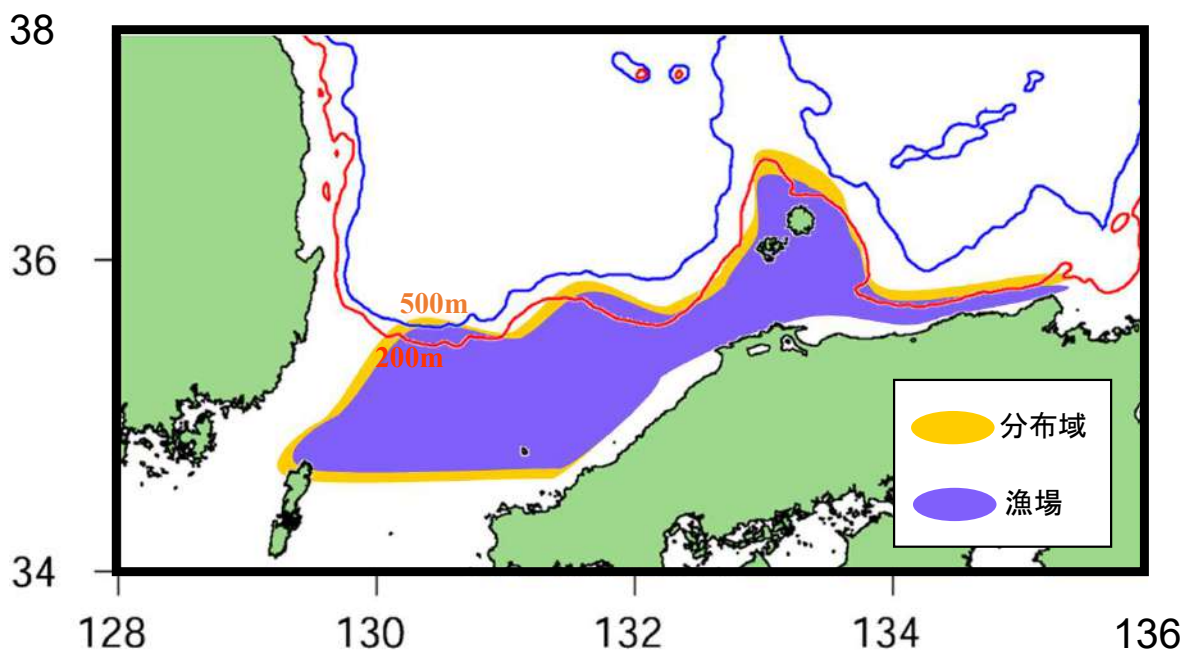
水中ロボットカメラで撮影されたかに牧場内のアカガレイ



# ソウハチ (地方名 いて、えて)

## 生態

【分布】 能登半島から山口県沖合の水深160m～250m



【成長】 雄は5歳で25cm、雌は7歳で35cmになる。

【成熟】 雄は2歳、雌は3歳で成熟する。1～3月に産卵する。

【食性】 アミ類、キュウリエソ、イカ類など

## 漁業の特徴

【漁法】 沖合底びき網漁業により漁獲される。

【漁期】 秋に多く漁獲される。



## 漁獲状況

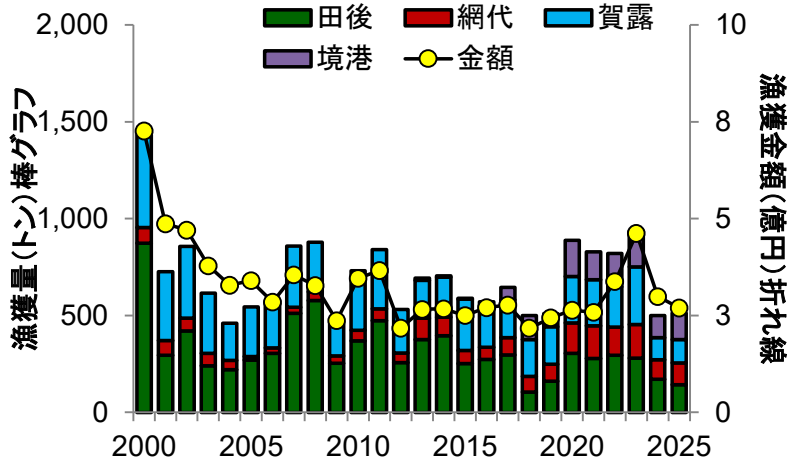
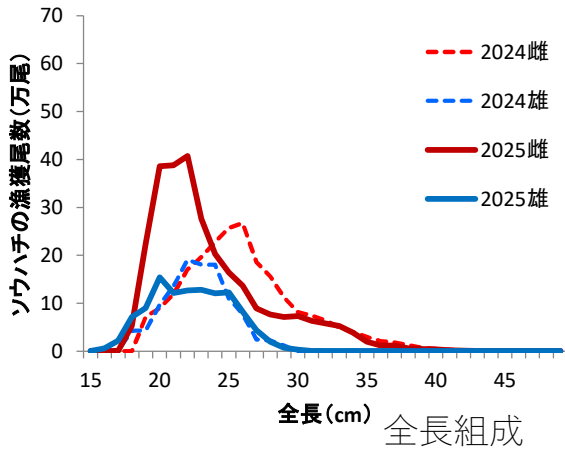
低位・横ばい



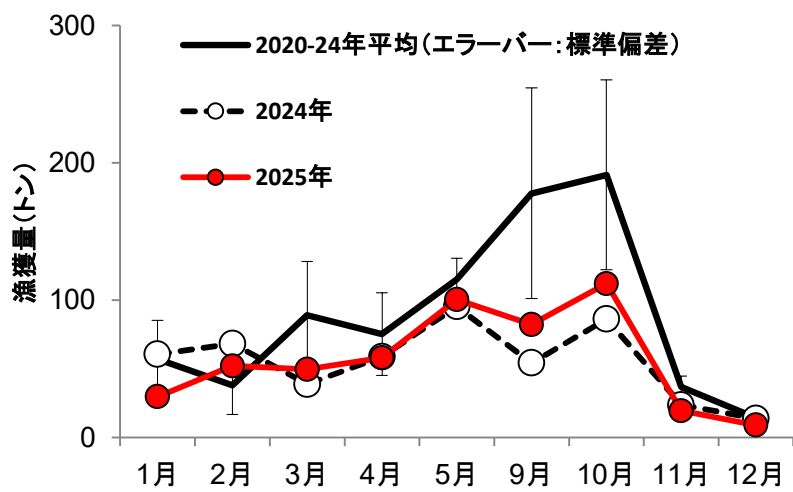
2025年のソウハチの漁獲量は512トンで前年並みとなりました（前年比103%）。月別漁獲量を見ると、盛漁期となる3～5月、9～10月がともに平年を下回る低調な漁獲となりました。

単価はやや下がり、漁獲金額は前年を下回る結果となりました（前年比90%）。

漁獲物の全長組成を見ると、雌は20～25cm、雄は20～25cmが主体で、前年と比較すると小型個体の加入が増えており、今後、漁獲動向がやや上向く兆候が見られます。



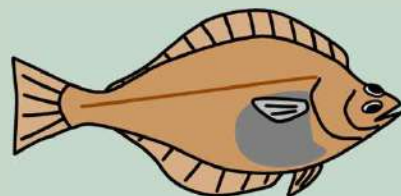
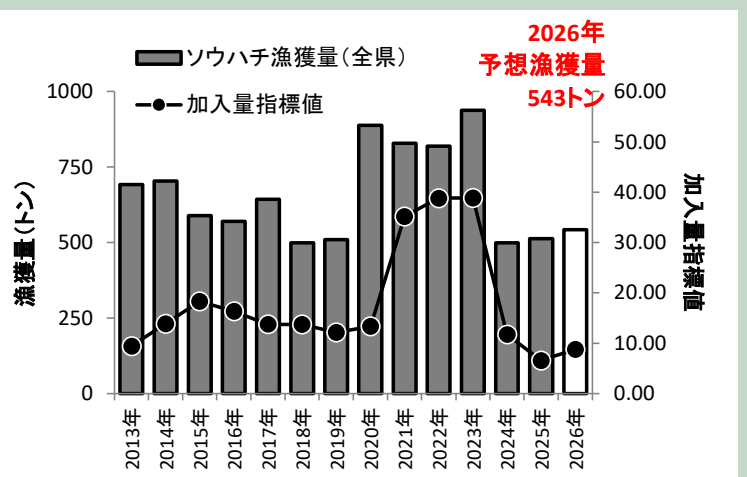
年別漁獲量



月別漁獲量

## 資源を大切に使うための取り組み

2010年以降の稚魚調査結果により、採集された全長7cm以下のソウハチが、翌年、翌々年に漁場へ加入すると推定し、加入量指数と漁獲量の関係を用いて、2026年の漁獲量予測を算出したところ、543トンとなりました。2024年以降、加入量指標値が低い状況が続いており、引き続き漁獲量が低調な状況が続くと予想しています。引き続き、稚魚調査を継続し、漁獲動向について注視していきます。

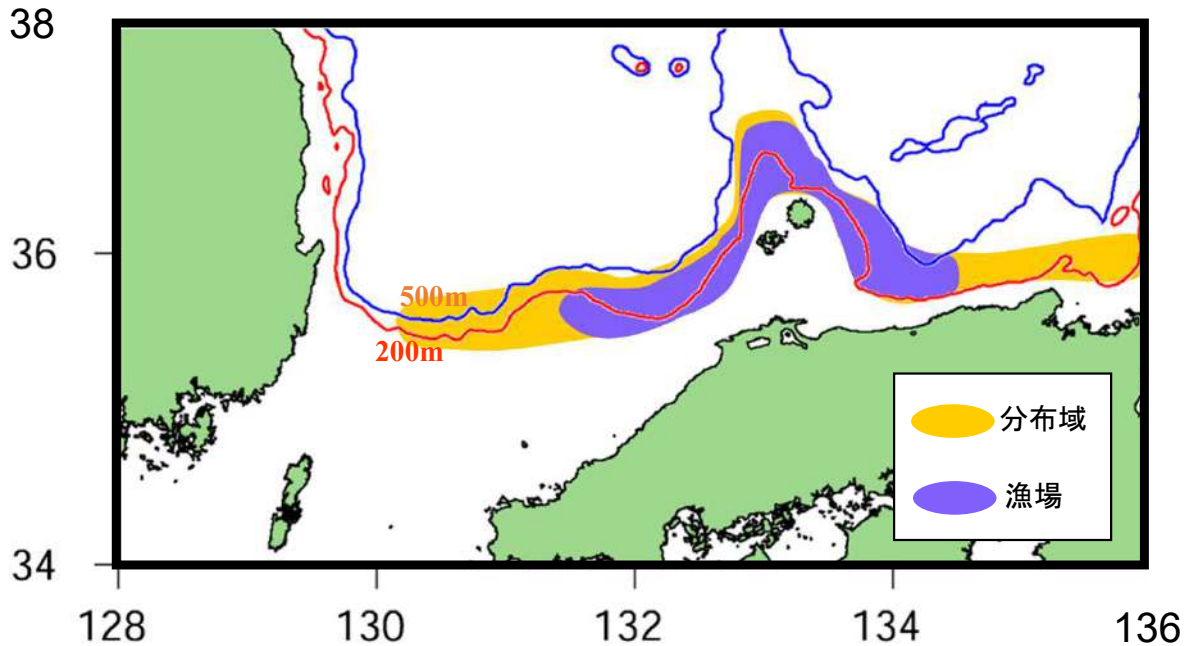


# ハタハタ (地方名 白はた)



## 生態

**【分布】** 日本海（日本海西部系群 山口県から石川県沖合）の水深約150～300m  
また、秋田県周辺を産卵場とする日本海北部系群の一部も日本海西部に来遊



**【成長】** 寿命は5歳。雌の方が大型になり、体長20cm程度、雄は18cm程度になる。

**【成熟】** 朝鮮半島北東部沿岸で産卵を行う。

**【食性】** ヨコエビ、アミ類などを食べる。


## 漁業の特徴

**【漁法】** 沖合底びき網漁業により漁獲される。

**【漁期】** 春と秋に多く漁獲される。

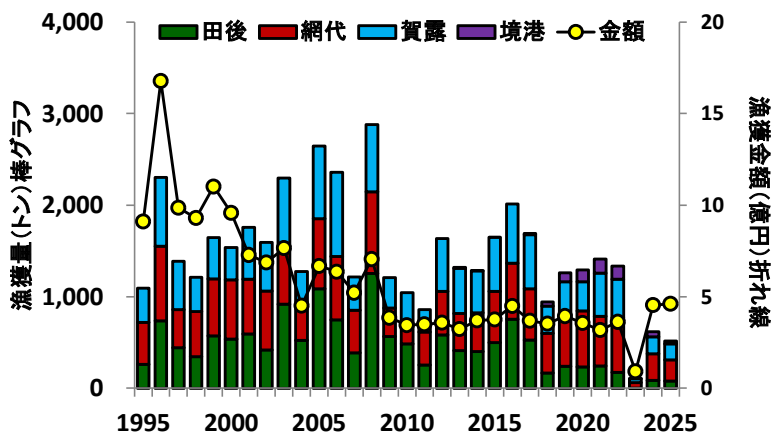


## 漁獲状況

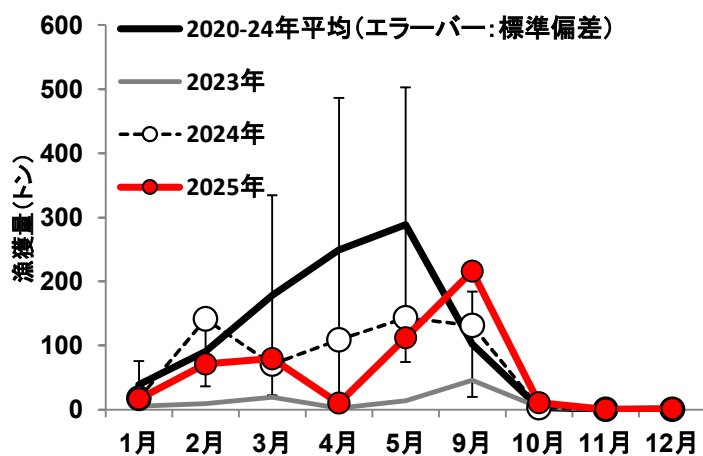
低位・横ばい 

2025年のハタハタの漁獲量は517トンで前年から減少し（前年比84%）、平年比54%と依然として低調な漁獲量となっています。

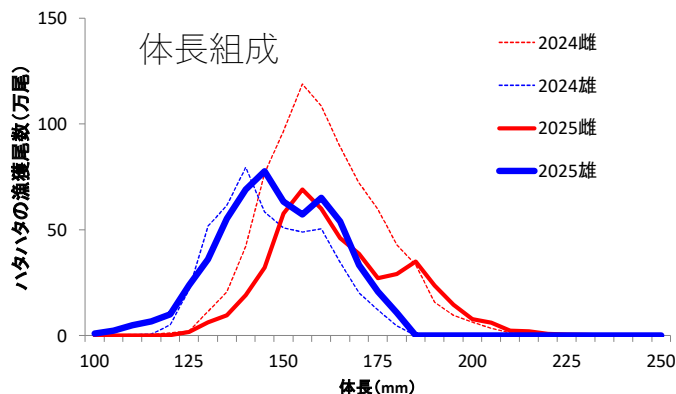
月別の漁獲量は、2～3月は70トン程度/月の漁獲がありましたが、例年盛漁期となる4月に漁獲が途絶え、5月中旬以降になって100トン程度の漁獲が見られました。その後、9月は216トンと平年を上回る好漁となりました。漁獲物の主体は、雄は体長13～17cm、雌は15～18cmの2～3歳魚でした。



年別漁獲量



月別漁獲量

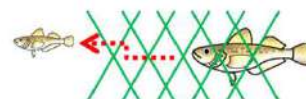


## 資源を大切に使うための取り組み

これまでハタハタを漁獲する際は、網の目合が小さく、小型魚が漁獲あるいは投棄されやすい状況にありました。ハタハタの小型魚は（ジント、6番及び5番）単価が5円（1尾あたり）以下と非常に安価であり、大量に漁獲しても経費に見合う漁獲金額を稼ぐことはできません。

一方、体長15cm（4番）以上になると体長が1cm大きくなるごとに単価が2倍高くなっていきます。つまり、1年保護して2歳魚以上になってから漁獲する方が、経済効率が高くなります。加えて、親魚の保護につながり、産卵量、加入量を増加させることになるため資源回復の一助となります。小型魚を保護するために目合を大きくすることが大切です。

全長15cm未満のハタハタを半分逃がすためには8節（約4.5～5cm）の網目が適当



8節網の使用

## べにずわいかご漁業の概要

この漁業は知事許可漁業として操業されていましたが、平成2年に施行された「べにずわいがに漁業の取締に関する省令」による大臣承認漁業を経て、平成14年、「指定漁業の許可及び取締り等に関する省令」中で、「日本海べにずわいがに漁業」として位置づけられ、大臣指定漁業となりました。なお、資源の回復を図るため策定した「日本海沖合ベニズワイガニ資源回復計画」に基づき、全船で実施されていた6月（30日間）の追加休漁に代わる措置として、平成19年9月から、日本ではじめて船舶ごとの年間漁獲量の上限を設定（個別割当て方式）しています。令和7年9月からTAC管理を開始しています。

【魚種】 ベニズワイ

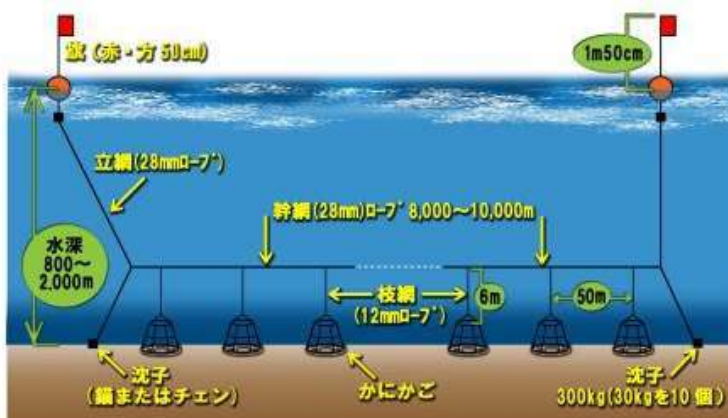
【漁場】 日本海中央部（大和堆、新隠岐堆）、山陰沖（浜田沖、隠岐沖合）

【隻数】 境港に水揚げする漁船船数 **鳥取：2隻、島根：6隻、新潟：1隻**

※令和8年3月時点で稼働している漁船

【漁法】 幹縄に約50m間隔にかにかごを180個取り付けた漁具を数セット用いる「かにかご漁業」により水深800m以深でオスのベニズワイを漁獲する。水揚げされたカニは船上で、コンテナに大きさ及び質別に選別され、船倉内で氷蔵保管される。出港から入港までの1航海は約一週間である。

【漁期】 7～8月は禁漁となっている。



※大臣許可においては、上記に関わらず、かごの側面最下部に内径9.5cmの円形網出口を3個以上設けたかごについては、網目の内径の長さ13cm以上。

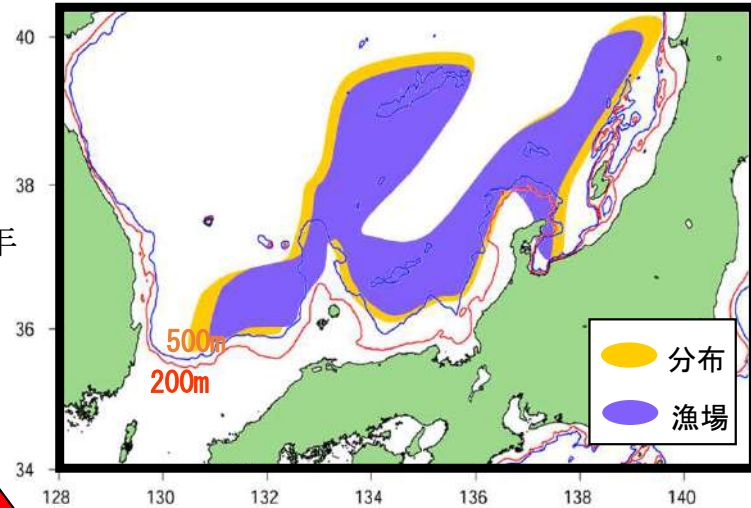
- 網目 網目の内径の長さ15cm以上、かごの側面最下部に形成される菱形の網目の対角線の長さ(縦、横とも)10cm以上。

# ベニズワイ (地方名 ベに、べにがに)



## 生態

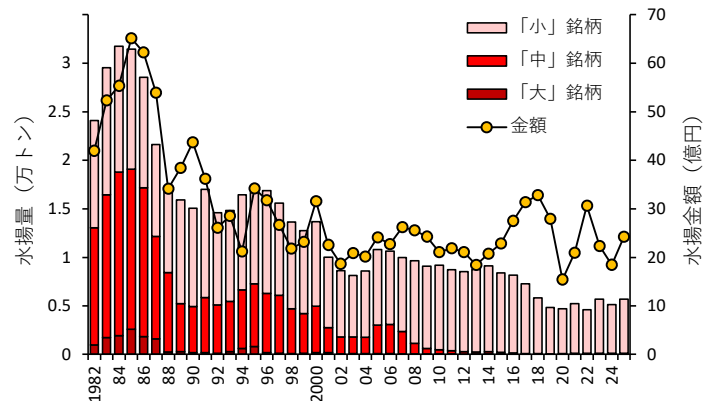
- 【分布】** 主に日本海（水深約500～2,700m）
- 【成長】** オスは甲幅が最大約15cmに達する。寿命は10年以上。メスは採捕禁止。
- 【成熟】** 2～4月、隔年産卵で抱卵期間は約2年
- 【食性】** ヒトデ、魚、イカなどを食べる。



## 水揚量と資源状況 低位・横ばい →

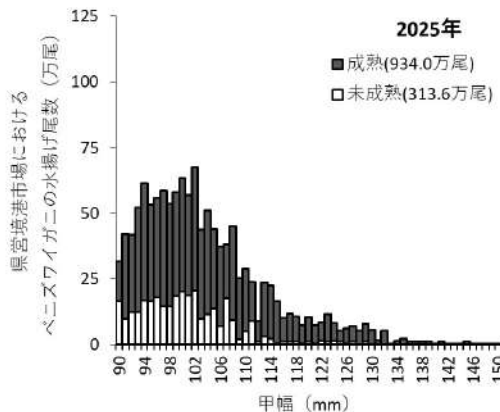
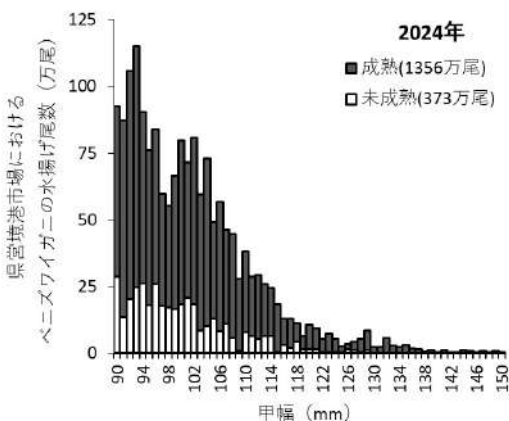
2025年の水揚量は5,688トン（24.2億円）でした。2007年9月以降、漁船毎に漁獲割当量（上限）が決められ各船が計画的に漁獲を行っています。

日韓暫定水域内の漁場では韓国漁船も漁獲していることや漁獲サイズ（甲幅9cm以上）のカニが少なくなっているため、資源は減少傾向です。



境港におけるベニズワイの銘柄別の水揚量の推移

また、漁獲の大部分は加工用「小B」銘柄であり、2025年の総水揚げケースに対する小B銘柄のケース割合は93.7%であり、漁獲圧は高い状態が継続されていると推察されます。甲幅組成を見ると、2025年は2024年にみられた90～95mmのピークがみられませ

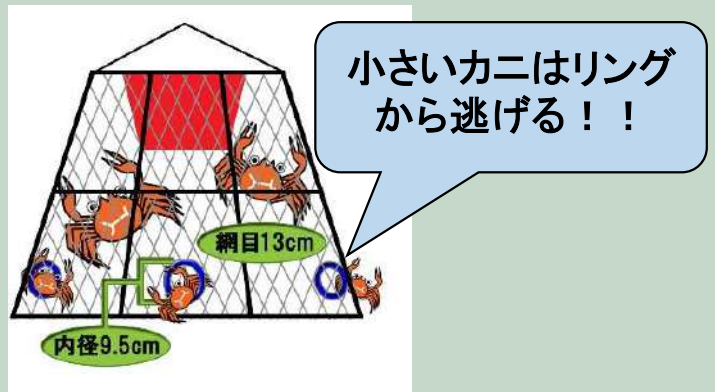
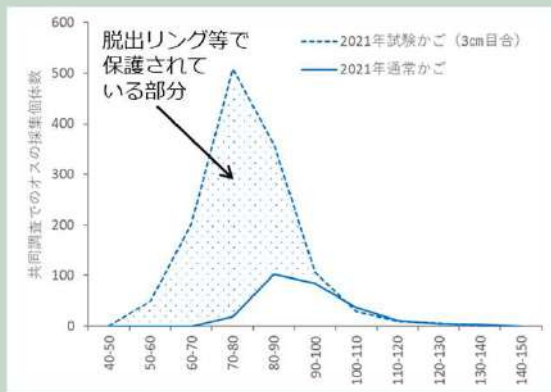


んでした。大和堆での小型ガニの漁獲が減少したことが要因です。

境港におけるベニズワイの甲幅組成

## 資源を大切に使うための取り組み

1990年代からベニズワイ資源が減少し始め、さらに1999年に日韓暫定水域が設定され漁場が狭められたため、水揚量の減少に拍車がかかったうえ、漁獲サイズも小型化しているという問題がありました。2005年（平成17年）から日本海沖合ベニズワイガニ資源回復計画が島根、鳥取、兵庫及び新潟県の漁業者により実施され、漁獲努力量の削減、減船及び改良漁具（小型ガニの脱出口（リング）付きかご）の導入が行われています。鳥取県水産試験場では漁業者との共同研究調査を行っており、このリング付きかごの保護効果を把握しています。試験操業では、漁獲規制サイズである甲幅9cmより小さなカニの約9割が脱出していることが判明しました。

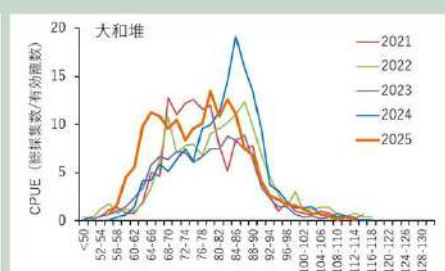
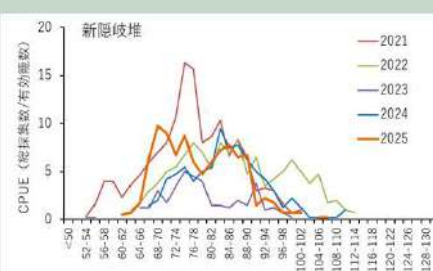
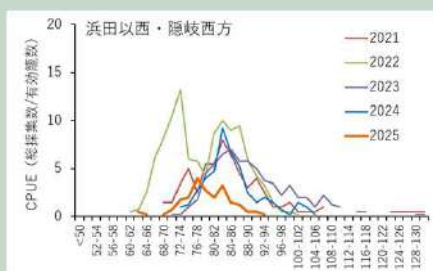


また、調査では3cm目合の試験かごを使用します。目合の小さい試験かごでは、漁獲サイズ未満の小さなカニが採集されるため、近い将来の漁獲動向が概ね予想できます。2025年2～5月に実施した調査では、漁獲対象未満のカニが新隠岐堆及び大和堆で小型ガニの加入がみられました。この結果から、今後は漁獲加入の増加が期待されます。



境港におけるベニズワイの海域別の水揚げケース数の年推移

適切に資源を利用するためには、今後もこうした調査を継続し資源状態の把握に努めていきます。



ベニズワイの海域別の甲幅組成

## 沿岸漁業の概要

本県における沿岸漁業は、漁船の大きさが5トン未満の比較的小規模な漁業経営体が大半を占めています。2024年12月末時点で県内の沿海漁業協同組合員数（正・准組合員数）のうち沿岸漁業に従事している人数は、852人（前年同時点の878人から26人減少）で全体の89%にあたり、県内沿岸域の18地区（3市5町）で操業しています。

主な漁業種類と漁獲対象種は、一本釣によるスルメイカ、ケンサキイカ（白いか）、サワラ等、刺網によるあじ類、サワラ、ぶり類、たい類等、小型底びき網によるかれい類、ヒラメ等、潜水によるイワガキ、サザエ等で、回遊魚主体に多種多様な魚貝類が漁獲されています。

## 漁獲状況

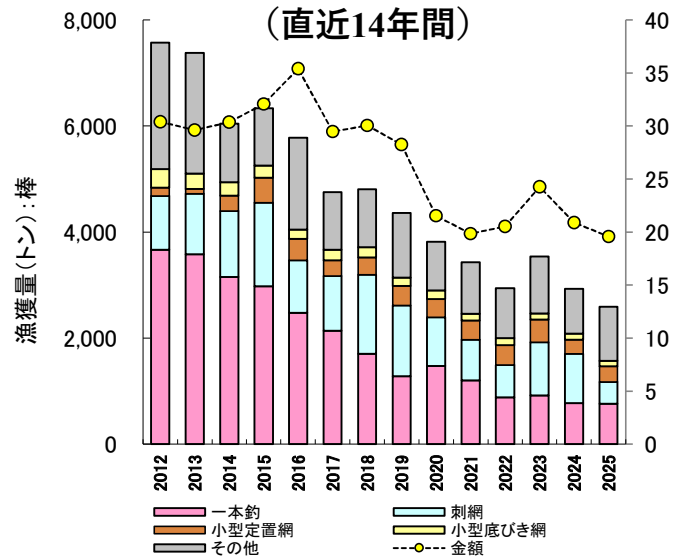
2011年以前の漁獲量（漁獲金額）は、約7,500トン（約35億円）で推移していましたが、2012-16年の漁獲量（漁獲金額）は、約6,000トン（約30億円）となり、2017年以降は減少傾向にあります。2025年は2,293トン（19.6億円）と前年よりも減少しました。

漁法別に見ると、一本釣（いか釣含む）と刺網とによる漁獲量（金額）が全体の51.2%（68.4%）を占めています。

## 賀露地方卸売市場でのセリ模様



## 沿岸漁業の漁法別漁獲量・金額の推移（直近14年間）



\* 2022年から米子市漁協統計を含む

## 2025年の漁法別漁獲量・金額及びその割合

漁法	漁獲量		金額	
	トン	比率	億円	比率
一本釣(19tイカ釣含む)	762	33.3%	10.6	54.3%
刺網	411	17.9%	2.8	14.1%
小型定置網	298	13.0%	1.3	6.6%
潜水・磯見	210	9.2%	2.4	12.0%
小型底びき網	97	4.2%	0.6	3.0%
その他	514	22.4%	2.0	10.1%
計	2,293		19.6	

\* 2022年から米子市漁協統計を含む

## いか釣漁業

29ページを御参照ください

## 刺網漁業

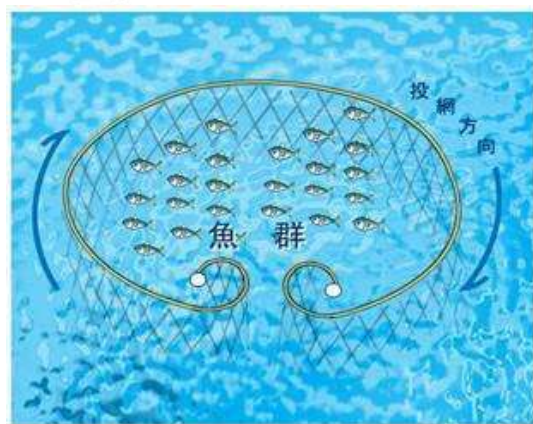
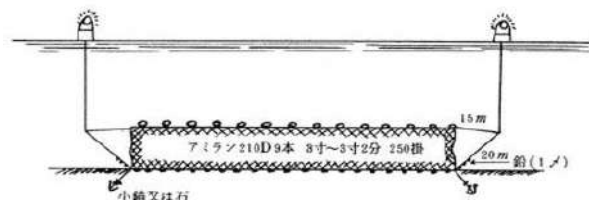
【魚種】 サワラ、ぶり類、たい類等

【漁場】 県内沿岸（人工魚礁、天然礁等）

【漁法】 刺網は、漁獲しようとする魚類が通過する場所を遮断するように網を張り、網目に刺させたり、絡ませたりして漁獲する固定式刺網と、魚礁や天然礁等で形成される魚群を巻き獲る狩刺網があります。主に1～3人で、夜間に操業します。



はまち（ブリ若魚）刺網の操業模様



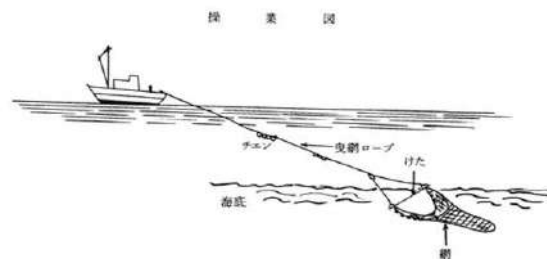
刺網の模式図

## 小型底びき網漁業

【魚種】 かれい類、ヒラメ等

【漁場】 県内沿岸（砂浜域）

【漁法】 小型底びき網は、10mのケタ棒で網口を広げ、海底で網を引っ張って底魚類を獲ります。主に1人で、夜間に操業します。



上図：小型底びき網の操業の模式図

左図：小型底びき網（境港）の操業模様

右図：停泊中の小型底びき網漁船（境港）

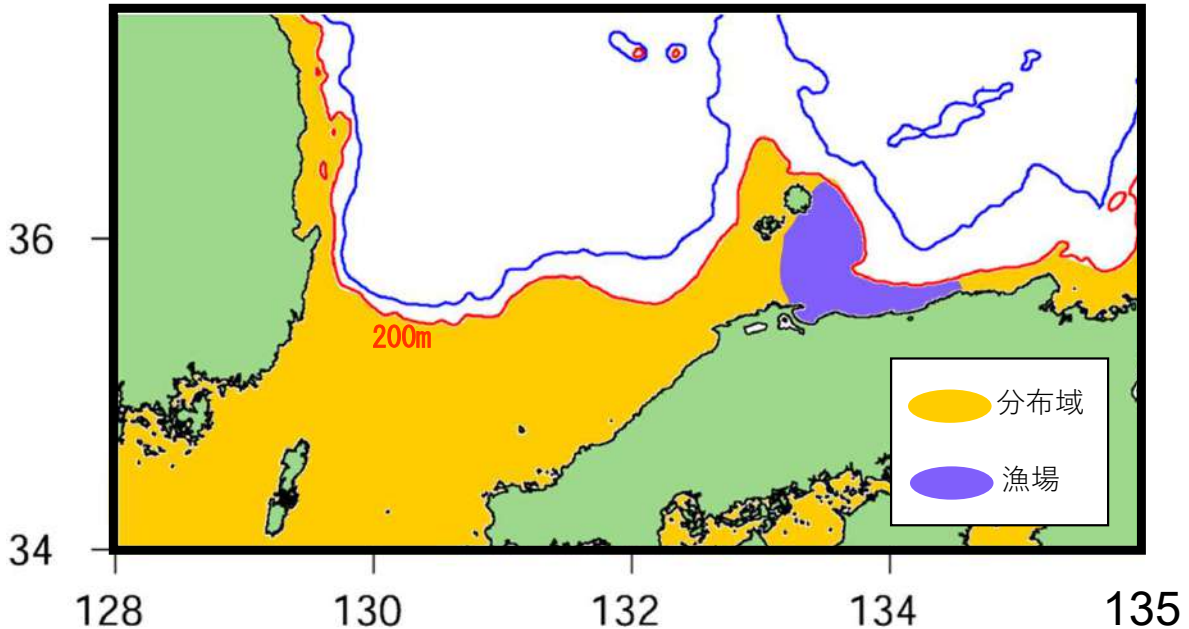


# ヒラメ (地方名 おおくちがれい)



## 生態

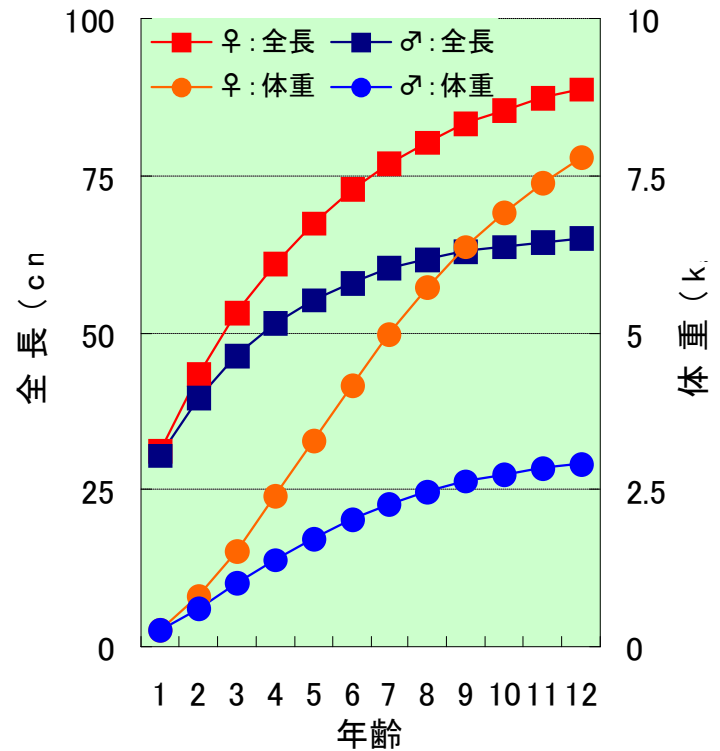
【分布】日本周辺をはじめ、北はサハリンから南は南シナ海までの砂底、砂礫などの沿岸域に広く分布する。



【成長】全長は1年で25～30cm、2年で36～46cm、3年で44～58cm、4年で47～67cm、5年で49～73cm程度に成長する。最大で全長100cm、体重10kgを超える。

【成熟】2歳で約半数、3歳で全ての魚が成熟する。鳥取沿岸では3～4月が産卵期となる。

【食性】稚魚から幼魚は主にアミ類を摂餌する。成長に伴い、カタクチイワシなどの魚類、えび類、いか類などのより大型の生物を餌にする。



ヒラメの成長 (2007金丸らから引用)

## 漁業の特徴

【漁法】小型底びき網、一本釣、刺網、定置網、沖合底びき網等様々な漁法で漁獲される。

【漁期】周年漁獲される。

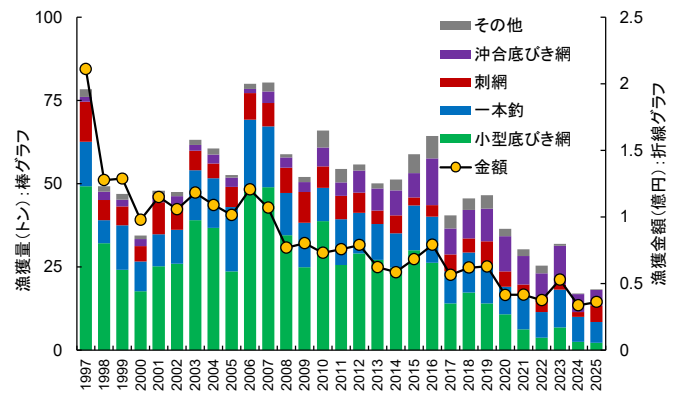
## 漁獲状況 低位減少



漁獲量は1997年以降急減し、2000年には半減以下となりました。その後、緩やかに増加し、2006年には80トンまで回復しましたが、2008年以降、漁獲量は減少傾向にあり低調に推移しています。2025年の漁獲量・金額は、19.8トン、36百万円で前年（17.6トン、34百万円）を若干上回りました。



## ヒラメの漁獲量・金額の推移

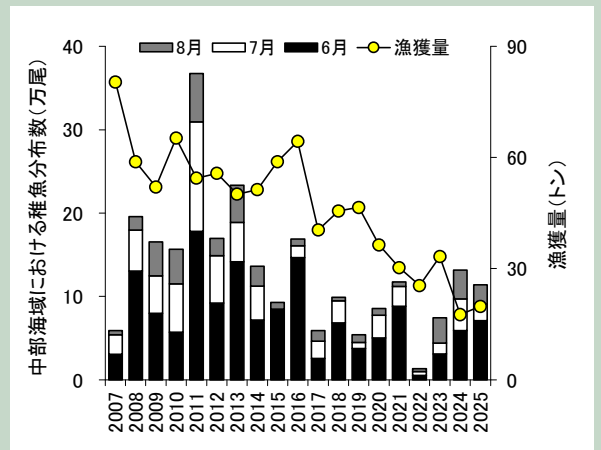


## 資源を大切に使うための取組

近年のヒラメの発生状況は低水準で推移しています。特に2017年以降は顕著に減少しており、漁獲量も減少傾向にあります。ヒラメ資源量の減少が懸念されることから、今後も全長25cm以下の小型魚を再放流し、資源を維持・回復する取り組みを継続することが大切です。

天然発生によるヒラメ稚魚が減少している一方、2014年から美保湾地域栽培漁業推進協議会が事業主体となり、自県生産したヒラメ稚魚を放流しています。試験放流期間を含めた2007～21年放流群の平均回収率は11.2%（最低3.5%、最高18.4%）と良好な結果を得られており、年によってはヒラメ資源の維持に一定の貢献があったものと考えられました。ところが、2020年以降は放流個体の回収率が減少しています。天然海域における稚魚の発生の良否は年によって変動があるものですが、ある程度成長した放流稚魚の生き残りが悪化傾向にあることは、生息環境が不適になってきていることを示唆するものかも知れません。近年は海水温が上昇傾向にあり、春季のヒラメ稚魚発生時期と重要な餌となるハマアミ類の発生時期との mismatch や夏季の極端な高水温等が生残率に影響している可能性があります。今後資源回復のために出来ることを探し、実施していく必要があります。

## 鳥取県中部海域におけるヒラメ稚魚分布数と漁獲量の推移



ヒラメ稚魚の放流状況 (4/11)



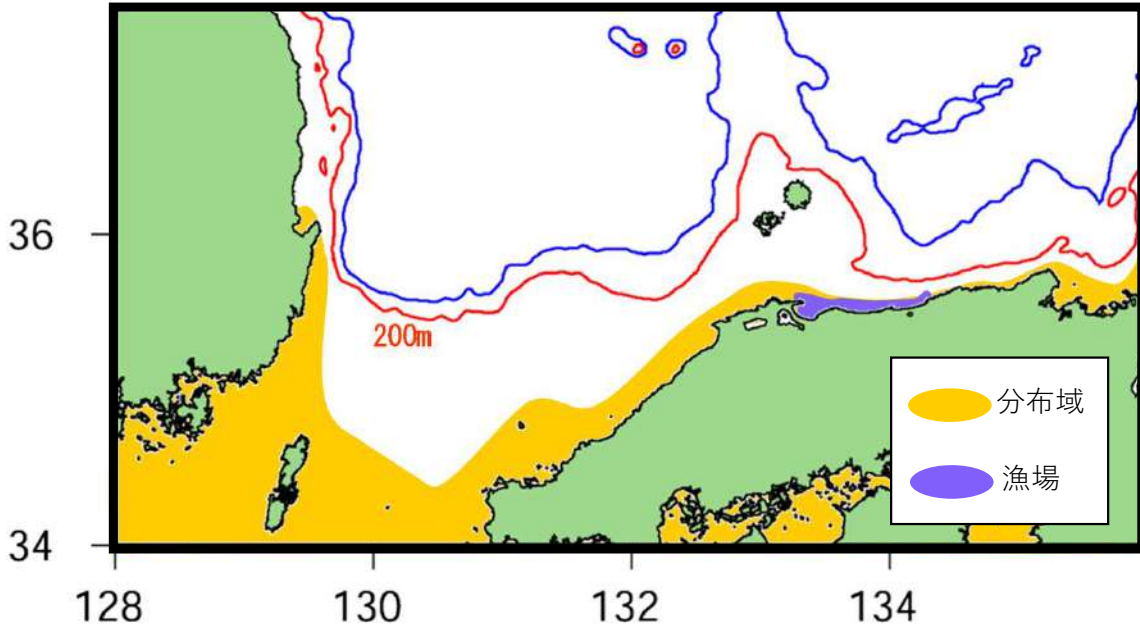
ところで、2019年度から栽培漁業センターでは、ヒラメ稚魚放流の事業効果を高めるため、境港地区の小型底びき網の活魚出荷によるヒラメの単価アップを目指す調査を開始しました。2022年には、その調査結果をもとにヒラメ活魚マニュアルを作成し、境港の漁業者へ配布しました。2025年現在、境港における活魚出荷率は30～40%程度と上昇し、単価も向上しました。

# サワラ (地方名 さごし : 未成魚)



## 生態

【分布】 東シナ海から黄海、渤海、さらに北海道以南の日本海に広く分布する。



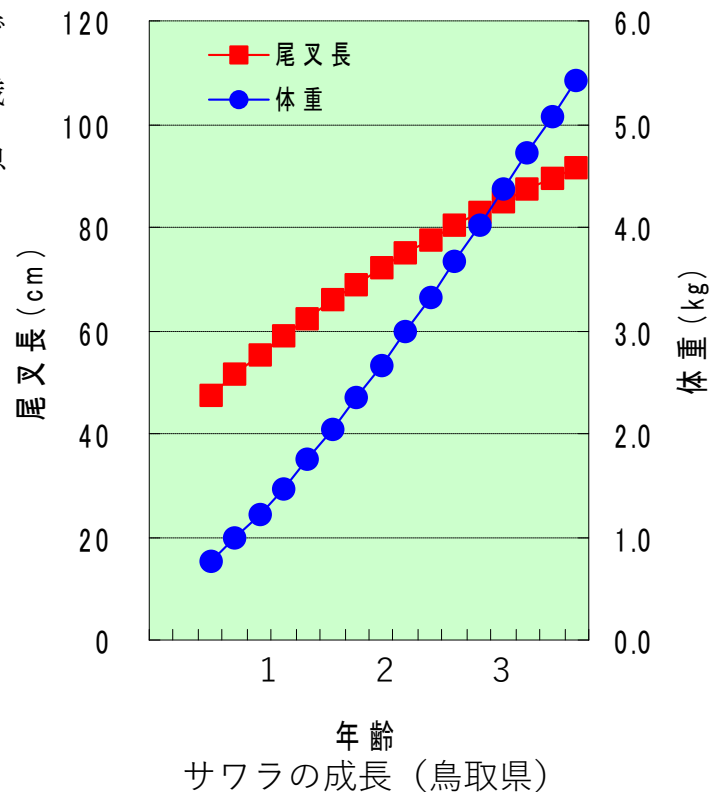
【成長】 半年で約45cm、1年で約56cm、2年で約73cm、3年で約86cmに成長する。寿命は6歳程度と推定される。なお、鳥取県沖では3歳魚までしか確認されていない。

【成熟】 1歳で一部が産卵し、2歳で全て産卵するが日本海での産卵はほとんどなく、東シナ海等に南下して産卵する。

【食性】 魚食性が非常に強い。

## 漁業の特徴

【漁法】 刺網 (下の模式図)、曳縄釣、定置網等の漁法で漁獲される。



【漁期】 周年漁獲されるが、4~6月の漁獲量は少ない。

# 漁獲状況

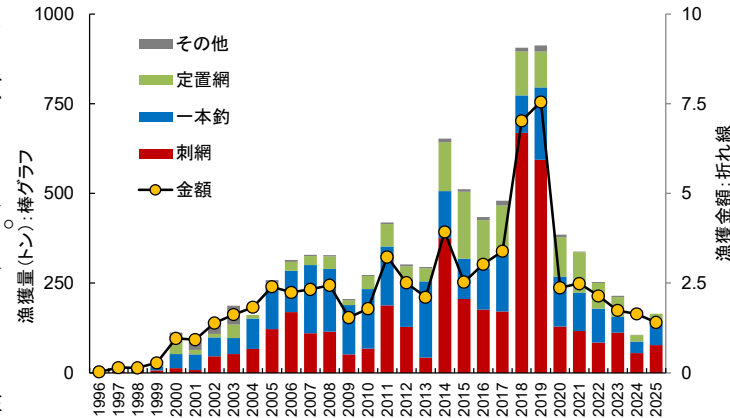
中位・減少



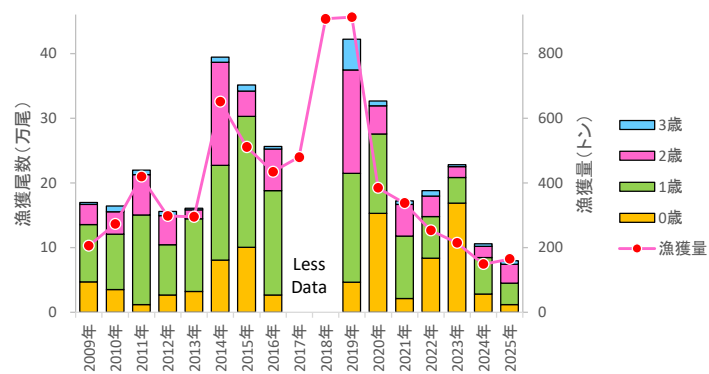
漁獲量は1998年以降増加し、2014年に急増、その後やや減少しましたが、2018、19年に著しく増加して、2019年の漁獲量（漁獲金額）は912トン（7.6億円）と過去最高になりました。しかし、2020年に384トンに急減しその後も減少傾向が続いています。2025年の漁獲量は前年より若干持ち直して165トンでしたが、漁獲金額は1.4億円に下がりました。

鳥取県で漁獲対象となるサワラは、東シナ海系群の0～3歳魚ですが、日本海では産卵しないため、その資源量は東シナ海からの未成魚の来遊量に依存しています。2024～2025年の漁獲組成を見ると1～2歳魚が主体で、2025年は前年より更に0歳魚（未成魚）が少なかったため、今後の漁獲動向を注視しています。現在、赤碕や淀江では釣りものの大型魚（2歳魚以上）をブランド化し、関西、関東をはじめ県外で高い評価を得ています。サワラはTAC（漁獲可能量管理制度）魚種の候補にも挙がっており、今後、有効な資源管理方策の検討がますます必要となります。

## サワラの漁獲量・金額の推移



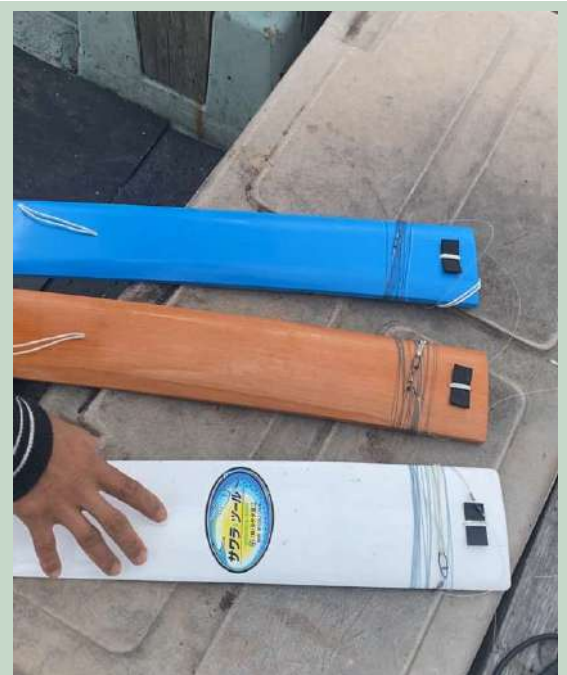
## 鳥取県におけるサワラ年齢別漁獲尾数と漁獲量の推移



### 潜航板を使ったサワラひき縄漁

近年、一部の漁業者が導入して成果を上げている潜航板を使用したサワラひき縄釣りについて、未導入の漁業者から漁具漁法を詳しく知りたいという要望を受けました。

そこで、本漁法を導入して釣果を上げている鳥取県漁協淀江支所の漁業者から情報を収集して、賀露支所に出向いて説明をしました。説明会の後、中東部で普及が進んでいるようです。今後も新漁法が普及するように情報を集めていきます。



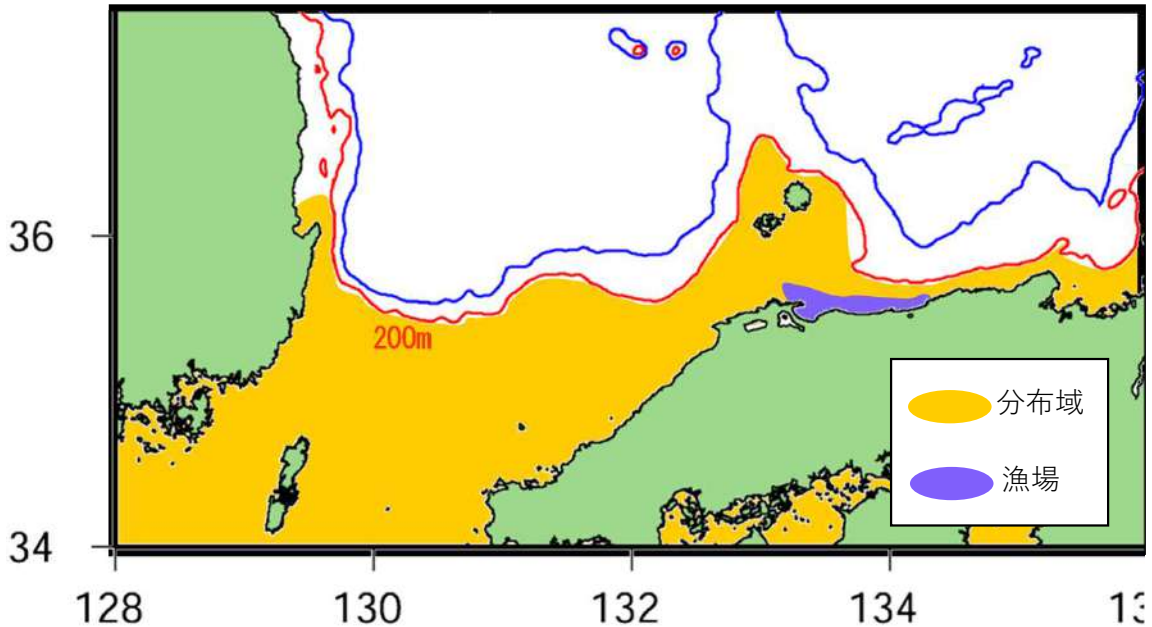
サワラ専用の潜航板  
上2つは木製、下は樹脂製

# マダイ (地方名 たい)



## 生態

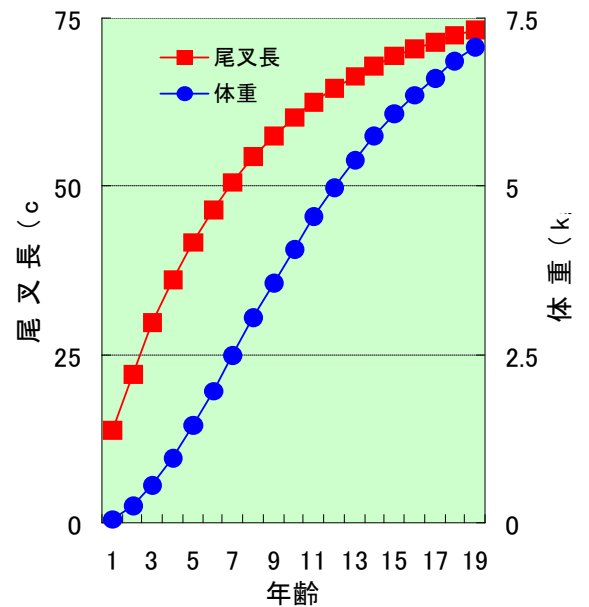
**【分布】** 北海道以南から尖閣諸島、朝鮮半島南部、東シナ海、南シナ海、台湾の水深30～200mの岩礁や砂礫、砂底などに広く分布する。



**【成長】** 尾叉長は1歳で約14cm、2歳で約22cm、3歳で約30cmに成長する。寿命は約50年と推定される。

**【成熟】** 3歳で約半数、4歳ですべての個体が成熟する。鳥取沿岸では4～5月に産卵期となる。

**【食性】** 稚魚はかいあし類、尾虫類を、当歳魚はヨコエビ類やアミ類、成魚は甲殻類や貝類、多毛類などを主要な餌にする。



マダイの成長 (2007日本海西部・東シナ海系群の資源評価から引用)

## 漁業の特徴

**【漁法】** 刺網、一本釣、小型底びき網、定置網等様々な漁法で漁獲される。

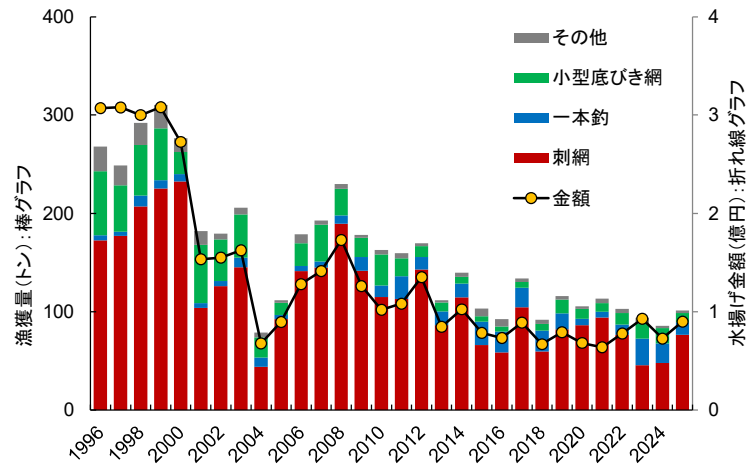
**【漁期】** 周年漁獲される。

## 漁獲状況 中位横ばい

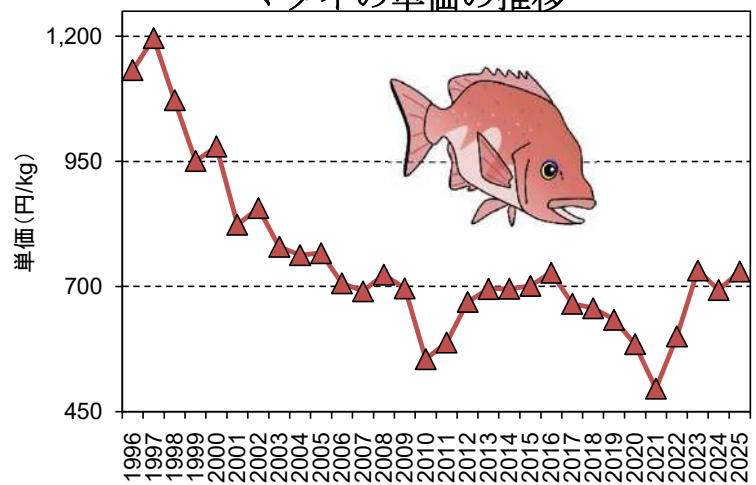
漁獲量（漁獲金額）は、2000年代前半に急減し、2004年には89トン（0.7億円）となりました。その後、2008年には241トン（1.7億円）まで増加し、その後、2012年まで180トン台の漁獲がありました。しかし、2013年以降は、漁獲量は再び減少し、100～150トンの範囲で推移しています。単価は1997年から下落し、2010年には555円/kgまで低下しました。その後、増減を繰り返して近年は700円/kg前後で推移しています。

2025年の漁獲量（漁獲金額）は前年より微増して124トン（0.9億円）となりました。単価は前年より微増し730円/kg でした。

### マダイの漁獲量・金額の推移



### マダイの単価の推移

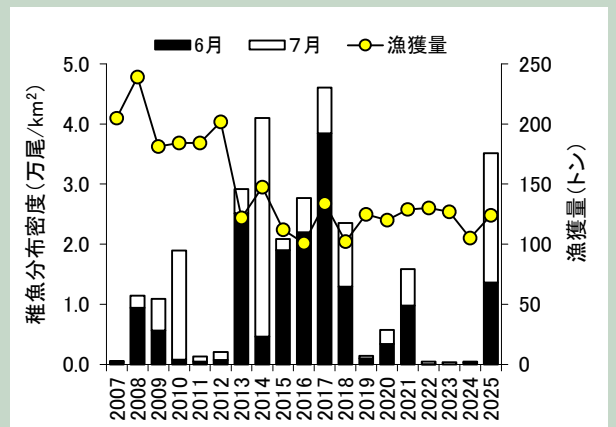


### マダイの寿命は結構長い

2025年に実施したマダイ稚魚調査によると、6月、7月は両月とも比較的高い分布密度となっており、稚魚の生残が良好であったと考えられました。2022年から2024年の稚魚分布密度は非常に低く、県沿岸のマダイ資源の今後について危惧していましたが、2027年からは漁獲の主対象である2歳魚以上が良く獲れるようになるのでは、と期待しています。

現在、（国研）水産研究・教育機構と共同で市場購入したマダイの年齢査定も行っています。途中経過ではありますが、マダイはかなり寿命の長い魚種のように、査定した最高齢の個体は46歳でした（70cmFL雄）。生き残りの良かった2025年生まれのマダイとも、40～50年うまく付き合っていきたいものです。

### 鳥取県中部における6、7月のマダイ稚魚分布密度と鳥取県漁獲量の推移



### 鳥取県で確認された最高齢のマダイの耳石

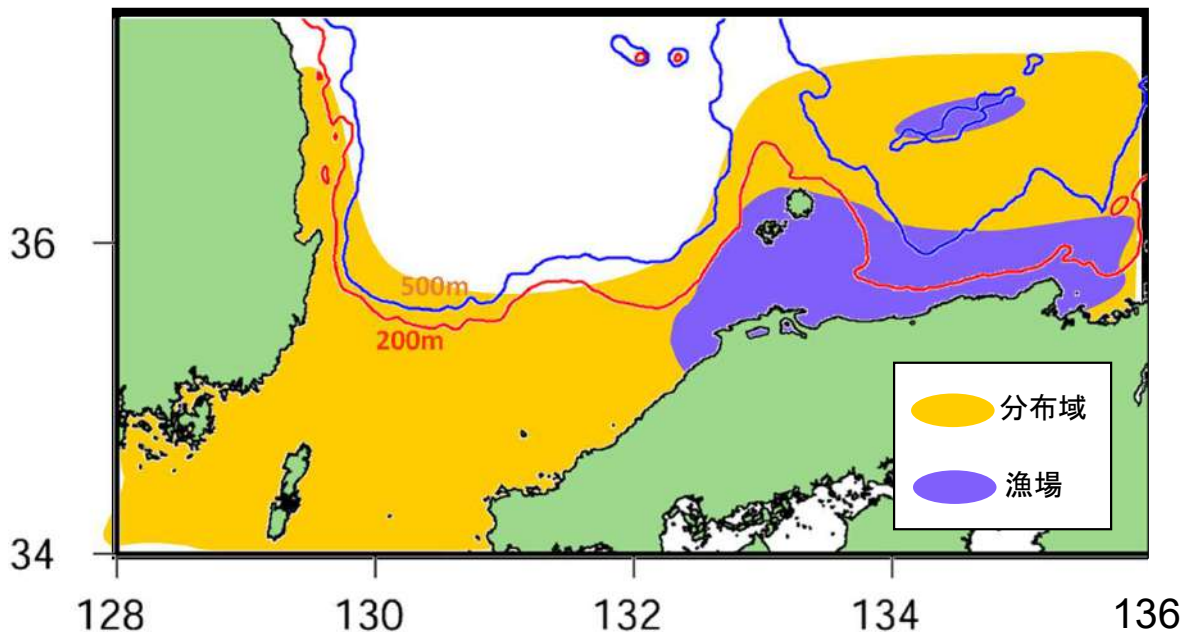


## ブリ (地方名 (出世魚) つばす→はまち→まるご→ぶり)



## 生態

【分布】 日本周辺の沿岸から沖合域 (よく似たヒラマサは全世界の温帯・亜熱帯に分布)



【成長】 寿命は7歳前後で、大きなものは尾叉長115cm、20kg以上に成長する。

成長は早く、1歳で40cm (1kg)、3歳で70cm (4.5kg) 程度まで大きくなる。

【成熟】 概ね3歳で成熟する。産卵場所は東シナ海の大陸棚縁辺部が中心と考えられている。産卵期間は長く1～6月まで続く。

【食性】 稚魚は初期にはカイアシ類などの動物プランクトンを摂餌し、3cm程度に成長すると魚類を食べ始める。13cm以上になると、カタクチイワシ、スルメイカなどの魚介類を主体とするようになる。

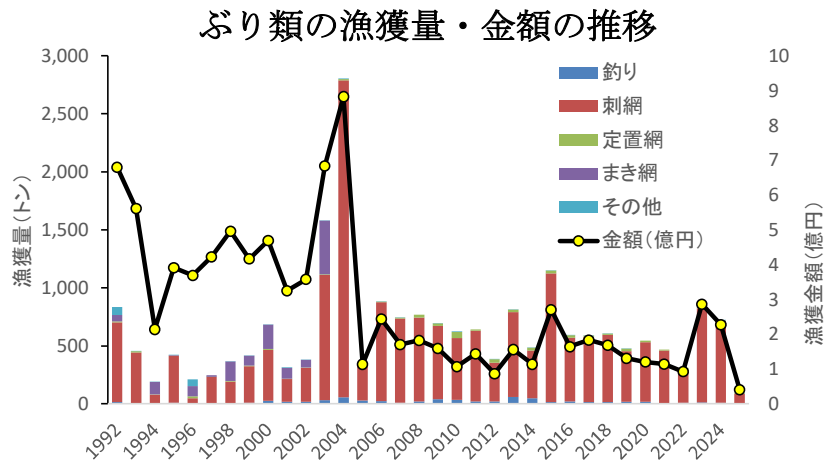
## 漁業の特徴

【漁法】 刺網、定置網、一本釣により利用されており重要な魚種となっている。

【漁期】 はまちやまるご等小型銘柄 (5kg未満) が周年漁獲される。

## 漁獲状況 低位・減少

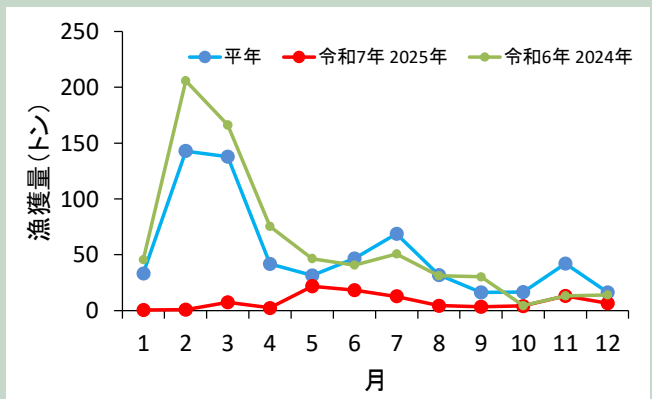
漁獲量（漁獲金額）は2004年の3,007トン（8.8億円）を最高に、以降2024年までは500～1,000トンの範囲で増減してましたが、2025年は、96トン（0.4億円）と漁獲量・金額ともに過去最低となりました。



### はまち不漁の原因

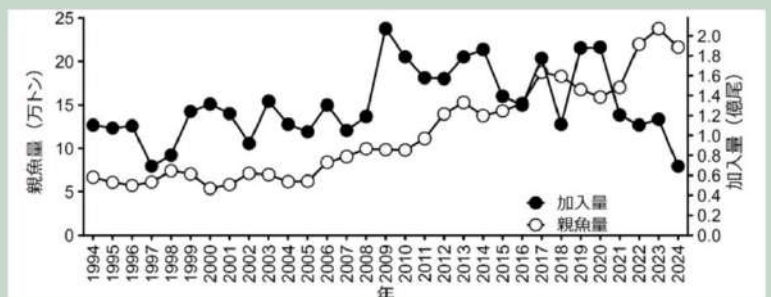
令和7年の沿岸漁業で漁獲されるぶり類（主にはまち銘柄）の漁獲量（1月～12月集計）は、昨年比13%、過去3年平均比15%と記録的な不漁となりました。例年2～3月に刺網漁業で漁獲されますが、年間を通して低調に推移しました。

### 鳥取県沿岸漁業によるぶり類の月別漁獲量



国の資源評価では、令和6年のブリの親となる魚の量（資源量）は、増加傾向であり、過去最大水準であると判断されています。一方、ブリの子ども（もじゃこ（藻雑魚）：0歳魚）の資源量は、令和3年から大きく減少しており、過去最低と判断されています。つまり、親はいるが、子がない状況（次世代資源を産むサイクルがうまくいっていない状況）となっています。また、海洋環境（海水温の上昇等）の変化などによって、近年北海道では、ブリの漁獲量が急増しており、分布海域が北部や沖合に拡大している可能性も考えられています。このため、本県で漁獲されるはま치의漁獲量も少ない状況にあります。今後、鳥取県沿岸へのはまちの来遊情報や海況状況をいち早く漁業者に提供できるように努めていきます。

### ブリの「親の量」と「子ども」の資源量の推移



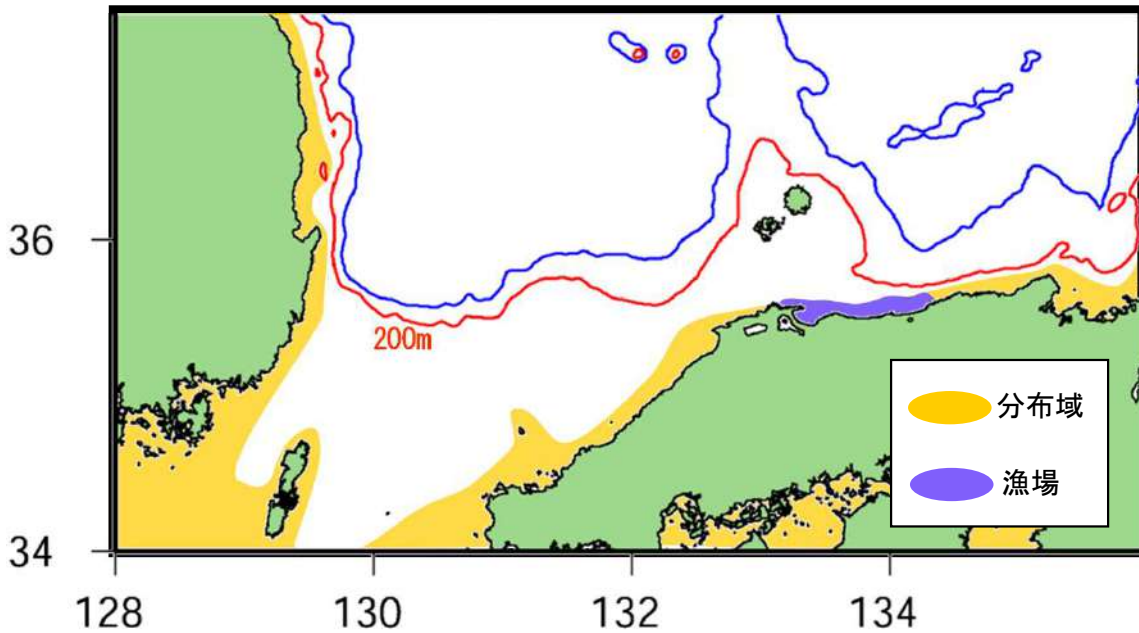
出典：国立研究開発法人 水産研究・教育機構

# キジハタ (地方名 あこう、あかみず)



## 生態

**【分布】** 青森県以南から台湾の岩礁域に分布する。鳥取県においては県下全域の岩礁帯に分布している。



**【成長】** 1歳で17cm、2歳で22cm、3歳で27cm、4歳で31cm、5歳で34cmに成長する。最大で全長60cm程度になる。耳石による年齢査定の結果、最高齢として32歳が確認されている。

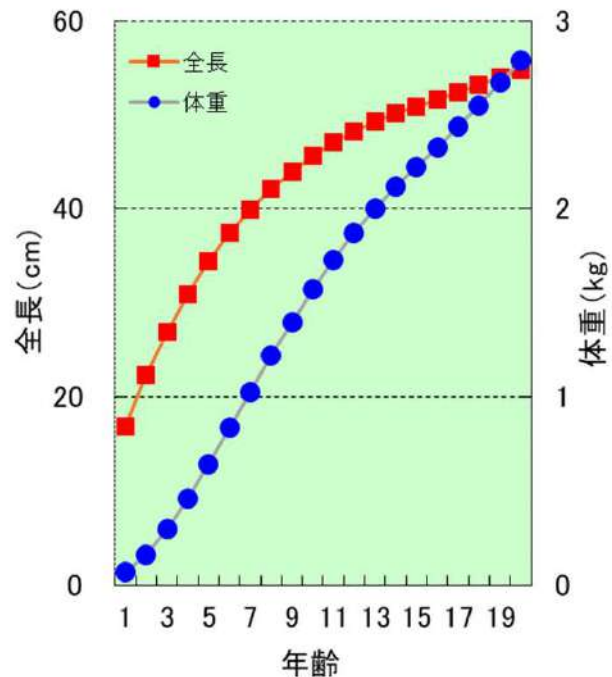
**【成熟】** 小型の間は雌で大きくなるにつれて雄に性転換する（雌性先熟）。雌は全長24cm（概ね3歳）で産卵する。鳥取県での産卵期は6～8月で、盛期は7月である。産卵期の漁場となる水深30～35mの岩礁帯が産卵場所と考えられる。

**【食性】** 甲殻類、魚類、頭足類などを餌とする。

## 漁業の特徴

**【漁法】** 漁獲物の約9割が一本釣である。産卵前の6、7月はハーレムを形成するため多獲される。

**【漁期】** 主に5～10月に漁獲される。



キジハタの成長(2012菅野の成長式と鳥取県の全長-体重関係)

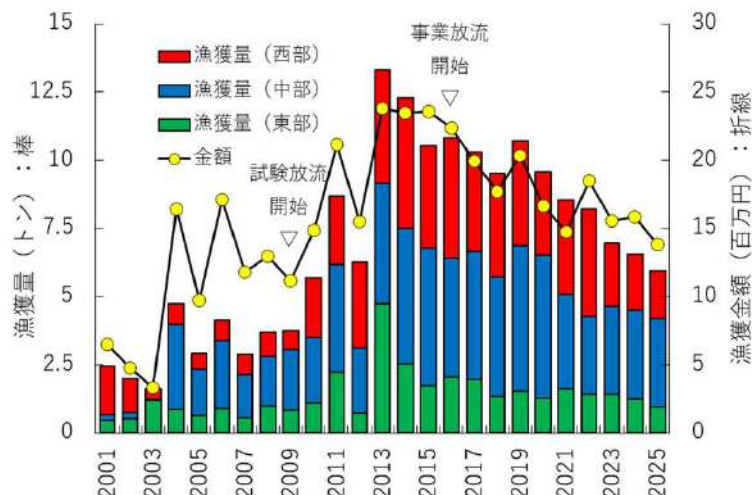
# 漁獲状況

中位・減少



漁獲量（漁獲金額）は、2013年に14.8トン（26.2百万円）まで増加していましたが、以降は減少傾向にあります。2025年の漁獲量（金額）は、5.9トン（13.9百万円）で、前年から0.6トン減少し、漁獲金額は、2百万円減少しました。漁獲の主体は3～5歳魚でした。単価は2022年から増加傾向にあり、2025年は2,331円/kgでした。

キジハタの漁獲量・金額の推移



## [種苗の放流]

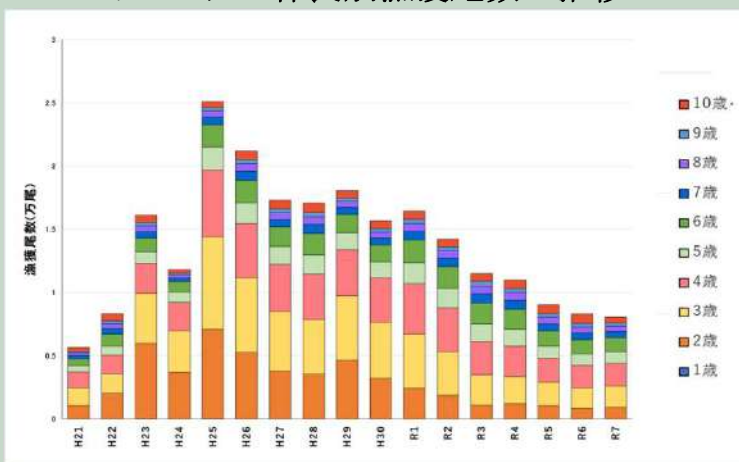
鳥取県の漁業者は、2016年から稚魚の放流に県内全域で取り組んでおり、2018～2020年は約5.4万尾の規模で放流を行ってきました。2021年からは鳥取県沿岸の環境に適した放流尾数を検討するため、2万尾の規模で放流を行うことにしています。これに併せて、栽培センターでは今後の放流規模に合わせた放流場所や手法の再検討に取り組んでいます。

## [漁獲サイズの制限]

資源保護のため全長27cm未満の個体の再放流に取り組んでおり、令和3年度からは鳥取県海区漁業調整委員会指示により規制の徹底を図っています。本格的に産卵を開始するといわれている全長27cmより小さな個体を漁獲制限することで、産卵をしたことのない個体の漁獲を減らし、翌年以降の親魚資源を保護することにつながります。



キジハタの体長別漁獲尾数の推移



漁業者によるキジハタの放流



# ソデイカ (地方名 赤いか)

赤いかは、釣り上げ時は赤色ですが、釣獲後、少し時間が経過すると一度白くなって、その後、また赤くなります。



## 生態

**【分布】** 日本では沖縄諸島周辺が主な生息域で、山陰沖へは対馬暖流に乗り来遊し水深130～250mの水深帯域に分布する。

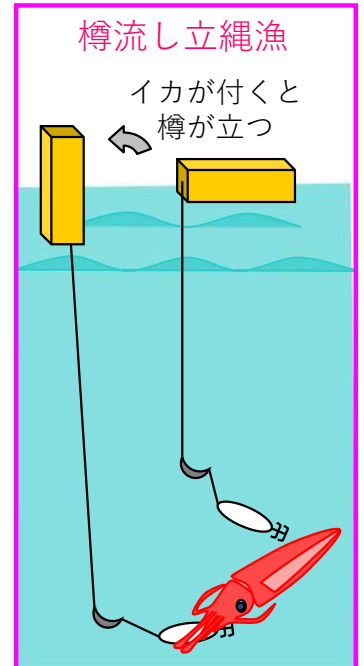
**【成長】** 胴長85cm、体重20kgになる最大級の食用イカで、寿命は1年である。

**【食性】** スルメイカや魚類等を餌にする。

## 漁業の特徴

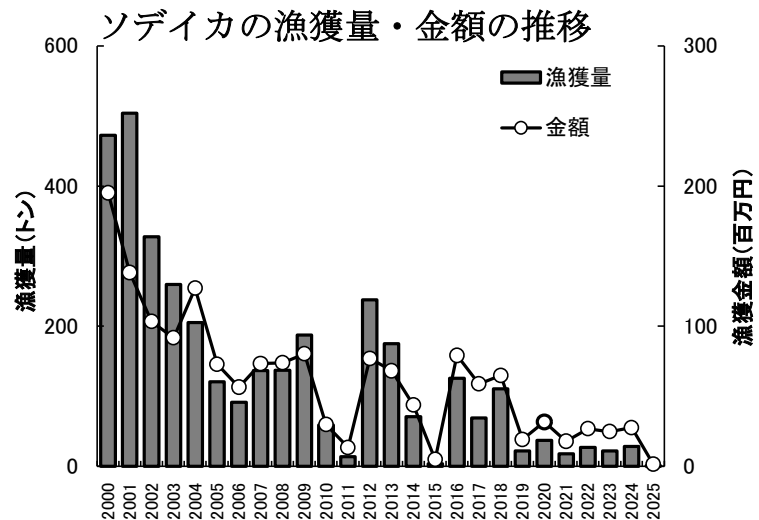
**【漁法】** 樽流し立縄漁で漁獲される。

**【漁期】** 9～12月



## 漁獲状況 低位・減少

漁獲量（漁獲金額）は、1998年の580トン（2.2億円）以降、減少傾向で2011年は14トンまで減少しました。直近5カ年では、2016,18年は126,111トンと好調でしたが、2025年は0.9トン（1.6百万円）と過去最低の漁獲量でした。



## ソデイカの漁況予測について

漁期前調査結果と予測式（海洋環境と沖縄の漁獲量を利用した重回帰式）により2025年の漁獲量は40トンと予測しました。しかし、実際の漁獲量は0.9トンと大不漁となりました。不漁の理由は下記が考えられます。

- ・冷水の接岸が弱く漁場形成が不利な状況にあった。
  - ・本県の試験操業で1個体も漁獲できず、兵庫県も不漁であったことから日本海への来遊量が少なかった。
  - ・ソデイカが期待できないため、サワラやヒラメ狙いの曳き縄漁への切り替えられた。
- 2026年も漁期前調査を実施しますので、是非出漁判断に役立ててください。

# サザエ



## 生態

【分布】北海道南部から九州の潮間帯下部-水深20mの岩礁域に分布する。

【成長】1歳で殻高約1cmになる。毎年1~2cmずつ成長し、5歳で殻高8cm程度になる。

【成熟】7~9月に成熟する。

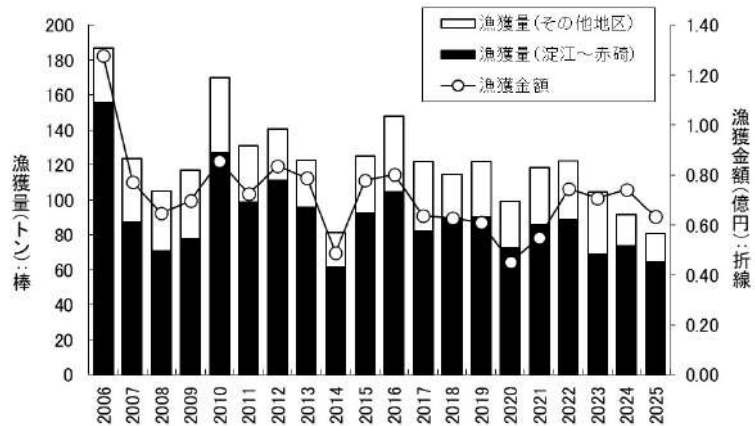
## 漁業の特徴

【漁法】潜水、貝突き及び刺網により漁獲される。

【漁期】周年漁獲されるが、特に5~8月に多い。

【漁場】岩礁域が広がる県西部（淀江-赤碕）で多く漁獲される。

漁獲量・金額の推移



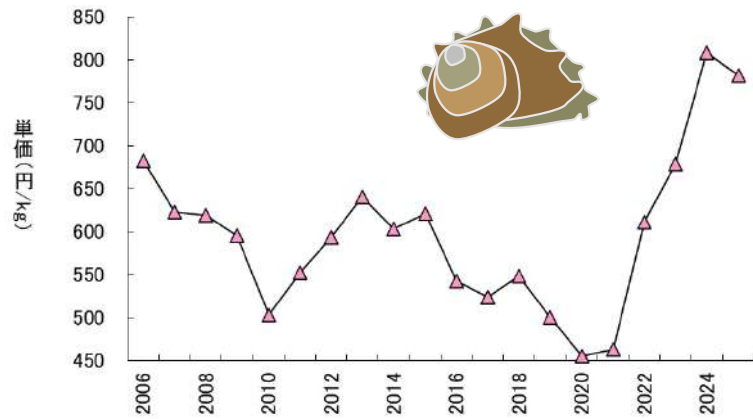
## 漁獲状況

低位・減少



2002年に311トンあった漁獲量は、近年90~120トン程度で推移しています。2020年からの漁獲サイズ制限（殻蓋2.5cm⇒3cm）の強化、餌料となる海藻の減少により漁獲量が減少したと考えられます。2025年は漁獲量は81トン、漁獲金額は63百万円と減少しましたが、単価は782円/kgの高値となりました。

単価の推移



## 資源を大切に使うための取り組み

漁獲サイズ制限（殻蓋3cm）や操業時間の短縮等の資源管理、種苗放流（放流時の外敵駆除等）による資源増殖が行われています。県栽培漁業センターでは大型種苗放流の検討や餌場となる藻場造成技術の開発を行っています。また、単価向上に繋がる砂抜きサザエの普及にも取り組んでいます。



砂抜きサザエ

# クロアワビ・メガイアワビ



## 生態

【分布】 日本海から九州南部の潮間帯から水深30mの岩礁域に分布する。

【成長】 2歳で殻長約5cm、4歳で約10cmに成長する。最大20cm程度まで達する。

【成熟】 10～11月に成熟する。近年は春先の成熟個体も確認されている。

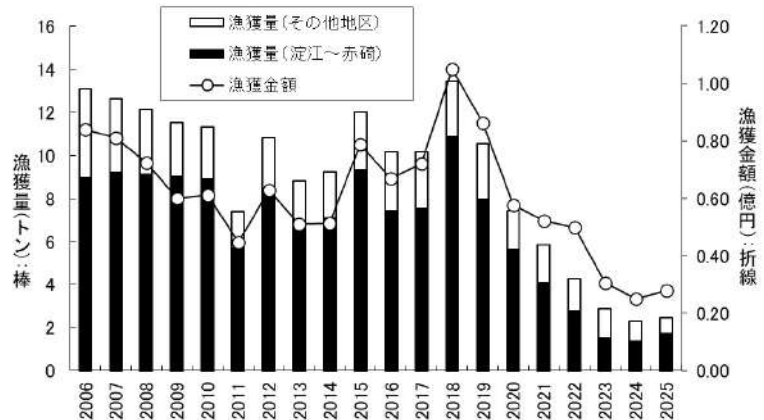
## 漁業の特徴

【漁法】 潜水により漁獲される。

【漁期】 周年漁獲されるが、特に4～5月に多い。

【漁場】 転石帯が広がる西部（淀江-赤碕）で多く漁獲される。

漁獲量・金額の推移



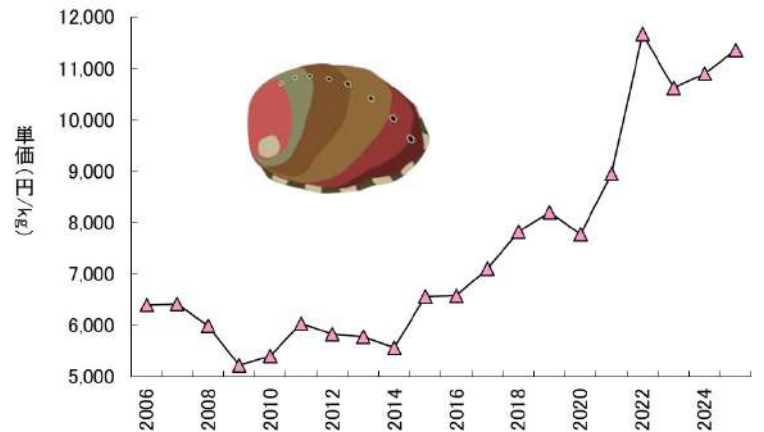
## 漁獲状況

低位・減少



1980年代から取り組まれた種苗放流により、2018年の漁獲量は過去最高13.4トン、1.1億円となりました。2020年からの漁獲サイズ制限（殻長10cm⇒11cm）の強化、餌料となる海藻（特に稚貝餌料の小型海藻）の減少により漁獲量が減少したと考えられます。2025年は2.5トン、2.8千万円に減少し、単価は11,367円/kgと高値となりました。

単価の推移



## 資源を大切に使うための取り組み

2004年から徹底した種苗放流（ヒトデ、タコ類の外敵駆除、外敵から襲われにくい岩の隙間へ放流）による資源増殖が行われています。淀江地区では2025年から個別漁獲割当の導入による資源管理を開始しました。また、中山地区では2020年から殻長11cmのクロアワビを「大山黒あわび」のブランド名で販売を行い、単価向上に繋がっています。



大山黒あわび(ラベル)

# イワガキ (ブランド名 なつき 夏輝)



## 生態

【分布】 陸奥湾から九州、日本海側の水深40m以浅の岩礁域に分布する。

【成長】 3歳で殻高約10cm、4歳で約13cm、5歳で約14cmに成長する。

【成熟】 7～9月に成熟する。殻高8cm程度から産卵する。

## 漁業の特徴

【漁法】 潜水により漁獲される。

【漁期】 6～8月に漁獲される。

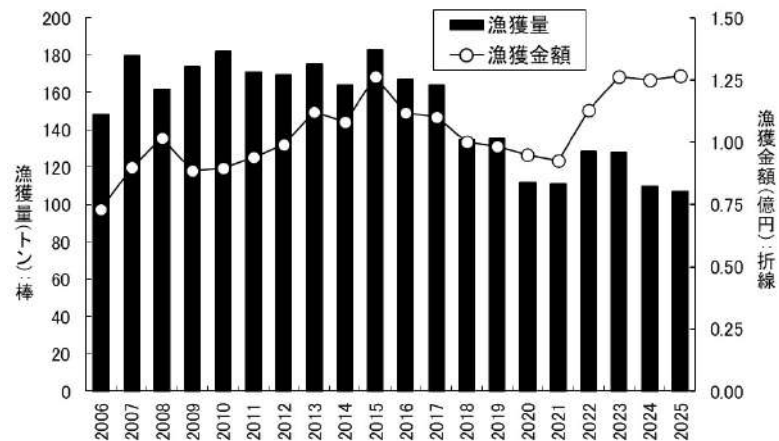
【漁場】 岩礁や人工構造物で漁獲される。

## 漁獲状況

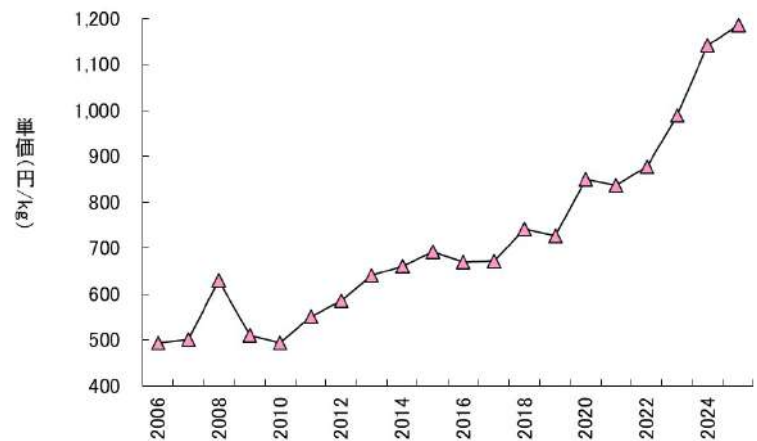
中位・横ばい

1980年代に50トン前後であった漁獲量は、人工構造物が新たな漁場として利用され始めたことで2000年には266トンに達しました。その後、漁獲量は減少しましたが、2015～2018年に県内14カ所に設置されたイワガキ礁での漁獲も継続されており、2025年の漁獲量は107トン、漁獲金額は1.3億円となりました。また、単価は1,186円/kgと過去最高の高値となりました。

漁獲量・金額の推移



単価の推移



## 資源を大切に使うための取り組み

漁獲サイズ制限（殻高10cm以上又は重量200g以上）や漁期設定（6～8月）等の資源管理が行われています。2005年から殻高13cm以上の良型イワガキに「夏輝（なつき）」ラベルを巻いて販売しています。また、2020年から福部地区では殻高16cm以上の良型イワガキ（約1kg～/個体）をプレミアム夏輝「砂丘の誉（ほまれ）」としてトップブランド化して販売しています。



プレミアム夏輝『砂丘の誉』



# バイ (地方名 黒ばい、本ばい、きんこばい)

## 生態

- 【分布】 北海道南部から九州の砂泥域に分布する。
- 【成長】 約1年で殻高約3cm、2年で約4.5cm、3年で約5.5cmに成長する。
- 【産卵】 海底の固着物に約1~2万粒の卵塊を数回に分けて産卵する。
- 【食性】 魚の死骸等を餌とする。

## 漁業の特徴

- 【漁法】 かご網、小型底びき網により漁獲される。
- 【漁期】 周年漁獲されるが、特に3~9月に多い。
- 【漁場】 砂泥帯が広がる美保湾で多く漁獲される。

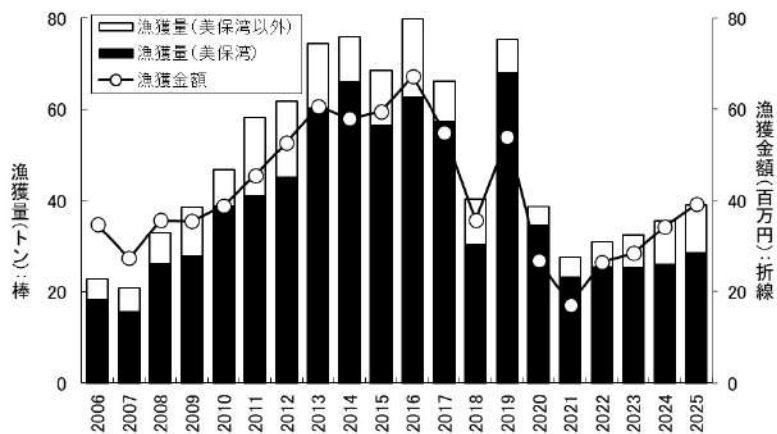


## 漁獲状況

中位・横ばい →

1970年代は80トン以上あった漁獲量は、環境ホルモン（有害な有機スズ）の影響により1990年代には数トン迄に減少しました。その後、漁場環境の改善により資源量、漁獲量は増加したものの、2018年はヒトデ大量発生等の影響により40トンに減少し、2025年は36トン、34百万円となりました。

漁獲量・金額の推移



## 資源を大切に使うための取り組み

鳥取県バイ資源回復計画の自主規制に基づき休漁期間（10月から翌年2月）の設定、漁獲サイズ制限（殻高3cm）、保護区の設定、カゴ数制限が行われています。また、自然産卵を促進する産卵器の設置が行われており、県栽培漁業センターでは設置適期について情報提供を行っています。



**バイ産卵器設置情報**

平成28年6月1日

1. 産卵器の設置場所は、産卵器の設置場所を指定する。産卵器の設置場所は、産卵器の設置場所を指定する。

2. 産卵器の設置場所は、産卵器の設置場所を指定する。産卵器の設置場所は、産卵器の設置場所を指定する。

3. 産卵器の設置場所は、産卵器の設置場所を指定する。産卵器の設置場所は、産卵器の設置場所を指定する。

4. 産卵器の設置場所は、産卵器の設置場所を指定する。産卵器の設置場所は、産卵器の設置場所を指定する。

5. 産卵器の設置場所は、産卵器の設置場所を指定する。産卵器の設置場所は、産卵器の設置場所を指定する。

6. 産卵器の設置場所は、産卵器の設置場所を指定する。産卵器の設置場所は、産卵器の設置場所を指定する。

7. 産卵器の設置場所は、産卵器の設置場所を指定する。産卵器の設置場所は、産卵器の設置場所を指定する。

8. 産卵器の設置場所は、産卵器の設置場所を指定する。産卵器の設置場所は、産卵器の設置場所を指定する。

9. 産卵器の設置場所は、産卵器の設置場所を指定する。産卵器の設置場所は、産卵器の設置場所を指定する。

10. 産卵器の設置場所は、産卵器の設置場所を指定する。産卵器の設置場所は、産卵器の設置場所を指定する。

鳥取県栽培漁業センター TEL:0858-44-321 FAX:0858-44-2888

産卵器に産み付けられた卵塊 産卵器設置情報(FAX)

## 沿岸漁業

# マナマコ (体色による名 赤、青、黒)



### 生態

【分布】北海道から九州に分布する。

【生息】赤なまこは岩礁域、青なまこ、黒なまこは砂泥域に生息する。

【成熟】県内では赤なまこは3～4月、青なまこ及び黒なまこは8～9月と推定される。

【食性】砂泥等に含まれる有機物等を餌にする。

### 漁業の特徴

【漁法】潜水、小型底びき網（なまこ桁網：境港）で漁獲される。

【漁期】12～5月に漁獲されるが、特に2～3月に多い。

【漁場】砂泥帯が広がる境港で多く漁獲される。

### 漁獲状況

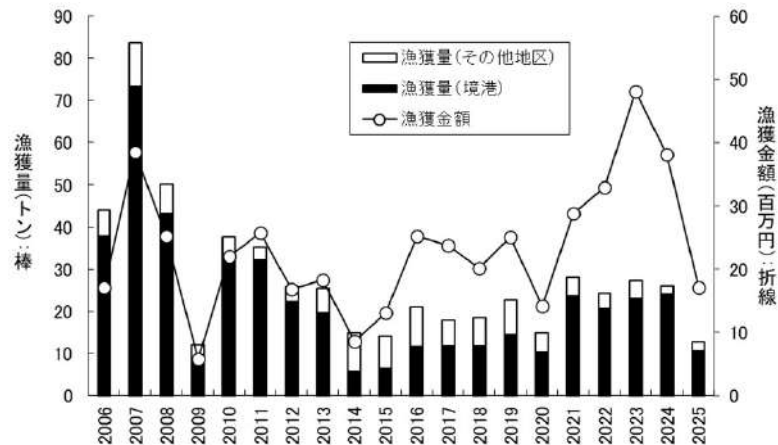
低位・減少



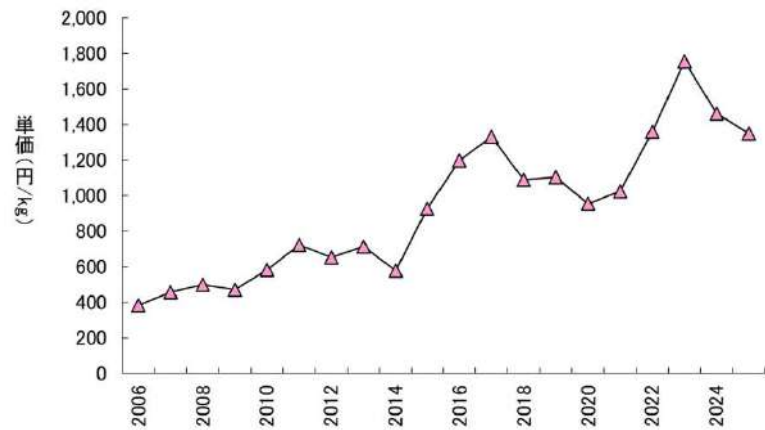
2000～2004年に10トン以下であった漁獲量は、漁が活発化したことで2007年には84トンに達しました。その後は減少に転じ、近年は20トン前後で推移しています。2025年は11トン、17百万円となりました。

また、単価は1,355円/kgと減少したものの、高値となりました。

漁獲量・金額の推移



単価の推移



## 資源を大切に使うための取り組み

漁獲サイズ規制、漁獲量制限、休漁期の設定等の資源管理が行われています。特に境港地区では個別漁獲割当を導入しており、漁期中の資源状況を確認しながら休漁期の延長・短縮等の判断を行っています。また、境港地区では採苗器設置による資源増殖にも取り組んでいます。



採苗器と確認された稚なまこ

## 水産試験場の取り組み方針

### 1 限りある水産資源を賢く、末永く利用する管理技術の開発と提案

水産資源や海洋環境の状況を常に把握し、持続的に漁獲できるような管理方策について提言します。

### 2 県産魚付加価値向上に対する取り組み

鳥取県の美味しい魚の市場価値を高めるためにブランド化を推進します。

### 3 燃油高騰に耐える漁業経営体への技術・研究支援

燃油等の漁業経費の高騰対策として、漁場探索や観測ブイ等による潮流情報、高精度な海況予測情報等を漁業者に提供し、操業の効率化を図り、漁業のスマート化を推進します。

### 4 中海・美保湾水産資源の回復方策の研究

中海の大崎地区造成浅場における環境モニタリングや出現生物の季節変化の把握、中海で利活用されているスズキの資源量推定のための基礎的調査や美味しい時期の特定（脂ののり）の調査を行います。また、美保湾のカタクチイワシの資源生態調査やマナモコの資源管理を推進するための調査を行います。

## 栽培漁業センターの取り組み方針

### 1 栽培漁業の推進

キジハタやヒラメ等の栽培漁業を推進するため、放流手法の改良や放流効果の検証を行うとともに、魚価の向上につながる調査、研究を進めます。

### 2 魅力ある養殖対象魚の創出

魅力ある水産物を安定供給できる強い産地づくりに向け、マサバやギンザケなどの養殖技術の開発と現場指導に努めます。

### 3 沿岸・内水面漁業重要資源の動向監視と増殖・管理技術の提示

イワガキ・ナマコの増殖技術の開発・普及、ヒラメ・マダイ・サワラ・ブリ等の沿岸重要底魚資源動向の監視と管理方策の提言、アユの遡上状況やシジミ資源の動向を調査し、資源回復策や管理方策の提言を行います。

### 4 収益性の高い漁業・養殖業の導入支援

漁業資源の減少、魚価低迷等により逼迫した漁業経営の改善を目指し、小型底びき網によるヒラメの活魚試験や海藻類、ムラサキウニなど新たな魚種の養殖技術の開発、大山黒あわびや大山雪見さわらなど大山ブランドの創出や副業としての養殖業の導入を進めます。

### 5 漁場環境の監視と修復技術の開発・普及

ムラサキウニの増加により衰退する藻場の回復を図るため、県が漁協・漁業者等と行うムラサキウニの大規模な駆除事業への指導及び効果把握、食害を回避するアラメ種苗の移植技術開発や深い水深帯での藻場造成技術開発等を進めるとともに、沿岸・内水面漁場環境(水温・塩分・溶存酸素・赤潮・貝毒・餌料プランクトン)の監視を進めます。



このレポートに関するお問い合わせ先

海洋環境及び、沖合漁業、中海・美保湾に関すること

**鳥取県水産試験場**

住所 〒684-0046 鳥取県境港市竹内団地107

電話 0859-45-4500

ファクシミリ 0859-45-5222

E-mail [suisanshiken@pref.tottori.lg.jp](mailto:suisanshiken@pref.tottori.lg.jp)

ホームページ <http://www.pref.tottori.lg.jp/dd.aspx?menuid=72009>



沿岸漁業及び内水面漁業に関すること

**鳥取県栽培漁業センター**

住所 〒689-0602 鳥取県東伯郡湯梨浜町石脇1166

電話 0858-34-3321

ファクシミリ 0858-34-2888

E-mail [saibaicenter@pref.tottori.lg.jp](mailto:saibaicenter@pref.tottori.lg.jp)

ホームページ <http://www.pref.tottori.lg.jp/dd.aspx?menuid=154053>

